

## 生徒エージェンシーを育むカリキュラム・マネジメント(3)

～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか 第24回公開教育研究大会を受けて～

The Curriculum Management for Student Agency 3

How to Foster and Assess Student Agency

to Take a Step Forward After the 24th Open Seminar for Teachers -

### 研究部 (研究推進)

齋藤 洋輔 森安 惟澄 栗山 絵理 佐藤 亮太  
中田 雅皓 根本 賢一 松原 直也

#### <要旨>

令和5年度より「生徒エージェンシー (Agency)」を中核的な概念に置き、カリキュラム改善に取り組んでいる。令和7年度は教科・科目の融合・連携の観点は大切にしつつも、生徒エージェンシーを如何に育て、評価するかに焦点を当てて授業開発に取り組んだ。第24回公開教育研究大会に向けて、教員研修では本校における生徒エージェンシーの羅針盤モデルを提示したり、エージェンシー尺度の調査結果を共有したり、授業づくりの切り口を具体的に示した。最終的に、13本の公開授業、12本の研究協議を実施した。これらの取り組みを通して、生徒エージェンシーを育むための授業を、教科や学校全体の3年間のカリキュラムの中に根付かせられるよう、多くの教員が協力し、継続的にカリキュラムをデザインすることの重要性について気付きを得ることができた。

<キーワード> 生徒エージェンシー (Agency), エージェンシー尺度, 教員研修, 教科融合・教科連携

#### 1. はじめに

令和5年度より、本校では「生徒エージェンシー (Agency)」を中核的な概念に据え、カリキュラム改善に取り組んでいる。本校の学校経営計画、およびスーパーサイエンスハイスクール (以降、SSH と表記) 事業の研究開発主題においても、“生徒エージェンシーを育む”ことが、学校全体で取り組むべき中心的な目的として位置付けられている (これまでの研究の経緯は、研究部 (研究推進) (2023, 2024) を参照のこと)。

研究部 (研究推進) (2024) では、令和6年度の研究活動を踏まえて、今後の課題や推進すべき方向性として次の4つの観点を示した。①生徒エージェンシーを言語化する活動、②生徒エージェンシーを育む方法論の検討、③教科・科目の融合・連携の意義づけの整理、④教科・科目の融合・連携のかたちの整理、である。また、一方で令和6年度の研究活動は、“教科・科目の融合・連携”に注力しすぎた結果、“生徒エージェンシーを育む”という観点がやや希薄になったという反省も見られた。

こうした課題を踏まえ、令和7年度の研究活動は、上記の観点①や②に関する、“生徒エージェンシーを育む”授業づくりを主軸に据えると共に、授業づくりに不可欠な視点である「評価」についても重点的に検討すること

にした。これを受けて、令和7年度の公開教育研究大会 (以降、公開研と表記) のテーマを「生徒エージェンシーを育むカリキュラム・マネジメント(3)～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～」と設定した。

また、それと並行して、上記の観点③と④も含めた“教科・科目の融合・連携”に関わる取り組みも継続することにした。中でもSSH事業の一環として、令和7年度より新たに設置された学校設定教科「SSH地球科学 (地理総合と地学基礎の融合教科)」は非常に挑戦的な試みであると言える。なお、本論では「教科融合」と「教科連携」の語については次のように定義し、区別して使用する。「教科融合」とは、現行の学習指導要領の枠組みを超えて、新たな教科や科目を創出すること、「教科連携」とは、現行の学習指導要領の枠組みの中で、教科間・科目間で協力を図ることとする。

本論では、以上のように“生徒エージェンシーを育む”という視点と、“教科・科目の融合・連携”という視点の2点から今年度の取り組みについて整理・考察を行う。

#### 2. 生徒エージェンシーを育むこと

昨年度 (令和6年度) 後半から今年度 (令和7年度) にかけて、生徒エージェンシーを育む授業づくりやその

評価方法の検討のために、教員研修の多くの時間を当てた(表1参照)。その中でも、今年度の4,5月の研修は生徒エージェンシーを言語化すること、6,8月の研修は生徒エージェンシーを育む方法論を検討することを目的として実施した。

また、今年度の活動の中で最も特質すべき点は、木村・一柳(2022)による「エージェンシー尺度」を活用した点である。エージェンシー尺度とは、OECDラーニング・コンパス2030で示されたエージェンシーの7つの主要構成要素(成長マインドセット、希望、アイデンティティ、目的意識、動機づけ、自己効力感、所属感)を統合した学習者のエージェンシーを捉えるための七元尺度のプロトタイプである。これは特に、就学期(小学校高学年から高校生)の児童生徒の生活経験におけるエージェンシーの認識および発達過程を把握することを想定して開発されたものである。本校のSSH事業の事業評価の一環で、令和7年1月に全校生を対象として、調査を行い、それ以降も継続的に調査を実施していくことを決めた。調査結果の詳細については、東京学芸大学附属高等学校(2023)を参照のこと。

## (1) 生徒エージェンシーを言語化する活動

### ① 4月研修「HR運営を学ぼう研修」

4月研修では、生徒エージェンシーを育む学級経営における工夫を再発見すること、年度当初であることを踏まえ、心理的安全性を確保し、教員がチームになっていくことを目的とした。

まず、OECD「学びの羅針盤」を参考に、生徒エージェンシー、共同エージェンシーの概念について紹介した。次に、本校勤務経験4年以内の教員から事前に聞きとっていた「HR運営に関して知りたいこと」という話題について、グループに分かれてディスカッションや情報共

有を行った。「学級経営で一番気をつけていることって何ですか?」などの質問に、様々な年代・経験の教員同士が意見を交わし合った(図1参照)。

最後に、VUCAな時代において学級運営を教員がサポートする「共同エージェンシー」がますます重視されていくことを伝えた。



図1 4月研修での話し合いの様子

### ② 5月研修「公開研究会の授業作り研修

#### ～学習モデルとエージェンシー尺度」

5月研修では、公開研で提示する本校の学習モデルやエージェンシー尺度の考え方を教員間で共有し、理解を深めることを目的とした。

まず、OECD(2020)の「Student Agency for 2030 仮訳」における生徒エージェンシーの概念と羅針盤モデルについて解説した。さらに、羅針盤モデルの文言を「本校教員の言葉」で言い換えた図を共有した(図2参照)。生徒エージェンシーについて、本校の文脈の中で言語化しようと努めた結果である。次に、エージェンシー尺度を紹介し、令和7年1月の調査結果を共有した。その後、ワークショップ形式で、「エージェンシー尺度」の中から特に気になる項目を参加者に一つ選んでもらい、その項目を伸ばすための授業上の工夫について、グループで

表1 令和6年度後半～7年度前半 教員研修テーマ一覧

回	日時	研修テーマ
令和6年度第4回	令和7年1月27日(月)16:00-17:00	「公開研の振り返り」・「次年度テーマの検討」
第5回	令和7年2月25日(火)16:30-17:15	「探究活動での生徒エージェンシー」
第6回	令和7年3月27日(木)13:00-15:00	「エージェンシー尺度調査の結果紹介」・「ポンチ絵のブラッシュアップ」
令和7年度第1回	令和7年4月28日(月)16:00-16:50	HR運営を学ぼう研修「HRと生徒エージェンシー」
第2回	令和7年5月15日(木)16:00-16:50	公開研究会の授業作り研修「学習モデルとエージェンシー尺度」
第3回	令和7年6月23日(木)16:00-16:50	授業改善研修「生徒エージェンシーを育む授業づくり」
第4回	令和7年8月27日(水)14:45-16:15	「生徒エージェンシーの『評価』を深める研修 ～木村先生と学ぶ、生徒エージェンシー尺度の具体的な活用と実践事例～」



一方で、本校で伝統的に大事にしてきた「教科教育」にエージェンシーの概念をどう落とし込んでいくか、という部分に難しさや課題を感じる意見も一定数見られた。



図3 8月研修での木村先生からのご講演の様子

### 3. 教科・科目の融合・連携をすること

昨年度（令和6年度）は，“教科・科目の融合・連携”の観点から生徒エージェンシーの育成や学習の転移について考えた。学校全体でカリキュラム・マネジメントを進め、より魅力的な学校をつくっていくためにも、各教科・科目間の相互理解は重要な基盤であり、（融合でなくとも）連携を強めていくことは必要なことである。また、昨年度の議論を振り返ると、このような融合・連携を検討することを通して、改めて、各教科・科目の専門性や特性、従来から大切にしてきた授業の核となる部分について見直す契機となった。そのような背景から、今年度も継続的に“教科・科目の融合・連携”の観点からの授業づくりに取り組んだ。

その中で、1年次に開講していた地理総合（2単位必修）と地学基礎（2単位必修）を融合させ、学校設定教科「SSH 地球科学（4単位必修）」を今年度より開講した。基本的には、これまでの授業運営通り、週2時間分は地理の教員が、2時間分は地学の教員が担当した。ただし、融合科目であるため、定期テストや授業評価は統合して実施した。「SSH 地球科学」のコンセプトとして、次の2点を目指した。

- ・2つの教科が融合することで、学習の転移を促し、より深い学びを実現すること
  - ・2つの教科が融合することで、普段の授業が社会課題（探究活動の課題）にシームレスに接続し、これらの課題を“自分ごと”として考えるきっかけになること
- 上記を実践していくために、1,2学期は地理と地学でそれぞれのカリキュラムを整理し、同じ時期に関連性の高い学習単元を設定することで、学習の転移が起こりやすくなるように心がけた。また、3学期は地理・地学の地

球科学的な知見と社会課題（探究活動の課題）に関連づけながら、授業内容を設定する予定である（図4参照）。そして、本公開研ではカリキュラム構築の一環として、SSH 地球科学から2本の授業を提案する。1本目は「防災」の実践として、自然地理分野（2学期前半）の授業実践を提案する。2本目は「国際理解／大気・海洋」の実践として、2学期後半のカリキュラム構成について提案する。

さらに本公開研では、「文学国語」と「数学I」の教科間連携による論説文を論理的に読む実践、「生物基礎」と「数学I A」の教科間連携によるがん検診について統計的に評価する実践、「言語文化（古典／近代以降の文章）」の科目間連携により作品を読み深める実践など、教科・科目間での連携の様子を示したい。これらの取り組みは、それぞれの専門性や特性を活かしつつ、生徒エージェンシーを育むことを目指したものである。これらのような教科・科目の融合・連携の取り組みを通して、今後のカリキュラム改善の視点を引き続き、見つけていきたい。

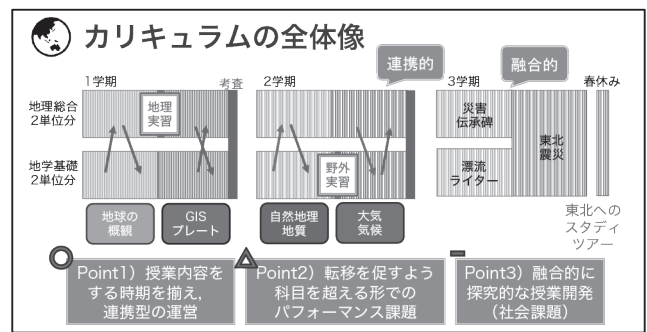
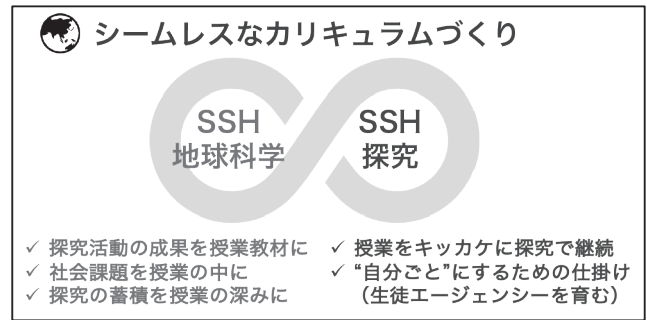


図4 SSH 地球科学のカリキュラム構成  
(上) コンセプト図, (下) カリキュラムの全体像

以降では、今年度の公開研における各教科・科目の公開授業の様子、および協議会での議論について報告する。

公開研 公開授業Ⅰ

## 国語科(言語文化) 説明されない古典 ～『伊勢物語』「筒井筒」を教材として～

授業者 喜古 容子

### 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～

エージェンシーの「羅針盤モデル」におけるコンピテンシーのうち、とくに「新たな価値を創造する力」の向上を目指す取り組みである。本時の授業で扱う本文(『伊勢物語』「筒井筒」第二段落)は、前時までにはひととおりの現代語訳をすませている。本時は、現代語訳をするだけでは気づきにくい解釈のポイントを提示し、本文の解釈を深めていく。生徒には、古典のことばの語感をとらえ、己の知識・経験を注ぎ込み、クラスメイトおよび教師との対話によって自分なりの、かつ妥当性のある解釈を作り上げていってもらいたい。

評価にあたっては、「本文のことばや文脈を適確にふまえて解釈しているか」という点に加え、「自分の知識や経験を加えて解釈を深めているか」という点も評価することで、「新たな価値を創造する力」を測ることとする。

### 2. 単元計画

第1・2時	第一段落の読解
第3・4時	第二段落の読解
第5時(本時)	第二段落の読解を深める
第6・7時	『大和物語』との読み比べ 第三段落の読解

### 3. 公開授業の概要 ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

古典の世界に親しむということを考えるとき、「現代語訳ではいけないのか」とは、しばしば出会う問いである。授業者はもちろん現代語訳で古典を楽しむことを否定しない。しかし現代語訳は、訳者の解釈を経たことばであることを忘れてはならない。異なる解釈、楽しみ方があったのかもしれない。生徒たちには、古典を原文で読む価値を体感してもらいたい。

本単元では、『伊勢物語』第二十三段「筒井筒」に取り組んだ。「筒井筒」は幼なじみの男女の物語である。本時は、男女の間に危機が訪れた第二段落を中心に扱った。原文のことばを丁寧にひろい、語義だけでなく語感(ニュアンス)を大切に、場の情景や男女の心情を解釈するようにした。特に注目した語は、「かなし」および「けしき」である。それぞれの語が類義語とどのような関係にあり、どのような語感を帯びているのかを古語辞典で確認し、解釈を深める際の足がかりとした。

ただ、『伊勢物語』の表現はきわめて簡潔である。限られたことばを手掛かりに想像をふくらませてゆくしかない。簡潔な表現は、多様な解釈を許容する。生徒一人ひとりが自分の経験を注ぎ込んで解釈し、自分事としてとらえてゆくことで、死んだように見えていたことばが、生き生きとした人間の姿に変わるだろう。物事をビジュアルに理解することが当たり前な時代だからこそ、ことばの力を信じられる授業をしたい。本時ではまとめの課題として、「うちながめ」しているときの女の心情をさまざまな角度から考えさせ、女の心のうちを各自で言語化する活動をした。

また、『伊勢物語』の簡潔さは、ひとつの美のかたちとしても評価が高い。三島由紀夫は『古典文学読本』の中で、「日本の古典が伊勢物語一冊であつたら現代の小説家はみな紋れ死ぬであらう。【中略】あの物語には人生の危機がどつさりぶつかれてゐる。それがあれほどさりげなく書かれてゐるのがおそろしい。」と指摘している。

すでに生徒たちは一学期に、第六段「芥川」を学んでいる。教科書本文は男が「白玉か～」の歌を詠んだところで終わっているが、実はそのあとに種明かしがあり、女を喰らった鬼の正体は、女を取り返しにきた兄たちであったことが説明されているのだと、授業の最後に告げるときの生徒たちのブーイングが忘れられない。教科書採録部分の簡潔な表現が生んでいた緊張感を、種明かしの説明文が破壊してしまったのだろう。

「筒井筒」と同様の話は、『大和物語』にも収められている。本時に続く授業では、『大和物語』の本文も提示する

ことで、生徒が自ずと『伊勢物語』の表現の特徴に気づくようにした。古典作品は、日本の言語文化の根っこの一端を担っている。古典の授業は、ことばを通して、己が所属する文化のルーツを学ぶものだと考える。「新たな価値を創造する力」を育むためには、自分の中に無意識のうちに形成されている価値を認識することもまた必要であろう。

#### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

日頃の授業では、本文の現代語訳をする活動が主になりがちであり、解釈を深める活動は従のものという意識が生徒のうちにもあったはずである。そして取り上げる解釈も、定期試験ですぐに「正解」となるような代表的な解釈であることがほとんどであったから、古典作品の解釈には「正解」があると大多数の生徒が考えていたことと思う。

本時ではすでに現代語訳を済ませた本文を扱うことで、解釈を深める活動にしっかりと時間を取ることができた。また本時は、解釈には他人を納得させる「妥当性」があればよいのだということを強調して活動に取り組んだ。授業中、生徒が発表する場面では、教師がその解釈の妥当性を判断してコメントし、妥当性が低い場合には高めるための手立てをアドバイスするようにした。解釈の「正解」を知らなければならないという呪縛から、ある程度生徒を解き放つことができたと思う。実際、授業では近くの生徒と活発に意見を交わしながら解釈を作りあげていく様子が多く見られた。また、まとめの課題では、これまでの授業では現れなかったような独創的な解釈が散見され、のちの授業でそれらの解釈についてクラス全体にフィードバックした際には、クラスメイトの解釈に感嘆する声が聞かれた。古典の原文を、文学作品として楽しむことを多少なりとも体感できたのではないだろうか。

今後の課題としては、週に2時間という少ない時間数の中で、いかに今回のような解釈を深める活動に時間を割くことができるかということが一番にある。原文を読むためには文法の勉強にも当然時間を取らねばならないが、できるだけ知識を厳選して扱うことで時短を図り、解釈のための時間を捻出したいと考えている。

## 公開研 公開授業Ⅱ

## 国語科 (言語文化) 「古典と近代文学に連続性はあるか」

授業者 若宮 知佐

## 1. 研究主題との関わり ～ 生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか ～

古典世界と我々が生きる現在の世界との連続／断絶性について考察する場を作ることで、生徒たちが自らの文化的アイデンティティについて省察し自覚的な言葉の使い手となる素地を育成したいと考えた。さらに、古典作品を自分たちの文化の源流として捉えるだけでなく、「そこに自分とつながり／分断のある他者がいる」という感覚を持たせることも目標とした。

本校生徒は、エージェンシー尺度の「アイデンティティ」項目のうち「自分なりの価値観を持っている」「自分の個性を大切にしている」という項目には「自分は該当する」と肯定的な回答を寄せたが、一方で「自分の中にほんやりとした不安がある」と答えた生徒も多かった。自己形成の途上にある高校生にとって、自分なりの価値観や個性が社会でどう受け入れられるか不安なのは当然だろう。国語の授業は、他者の価値観や思いに触れて自分のそれを磨くための絶好の機会である。今回は、生徒たち一人ひとりが既習の古典作品を現代に甦らせる活動を行うなかで、時を隔てて古典作品の中の他者と出会うことを企図した。また、本校は2・3年生で「文学国語」と「古典探究」を履修する。今回の単元が、これらの科目に自分なりの意味づけをして向き合う端緒となることをも期待した。

## 2. 単元計画

単元目標 「思考力、判断力、表現力等」B-(1)「読むこと」オ「作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。」

- 1・2時間目 リービ秀雄「なぜ日本語で書くのか」読解と「文体」についての話し合い
- 3時間目 古典と近代文学の連続性／断絶性についてアンケートフォームに答える  
各自教科書から古典作品を選び、リライトの構想を立てる
- 4時間目 NotebookLMで古典作品を書き換え、批判的に読んだうえで手直しする  
振り返りフォームで「リライトの意図」「リライトして気づいたこと」を答える
- 5時間目 班(4～5人)で自分の作品と制作意図を発表し合い、互いに傾聴する  
班で古典世界と現在の世界との連続／断絶性について話し合い、自分の意見をまとめる
- 6時間目 (公開授業) 下記項目3を参照
- 7時間目 「日本における人称代名詞の歴史」や「文学作品は翻訳できるか」といった問題について検討

## 3. 公開授業の概要 ～ 生徒エージェンシーの育成の観点から ～

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
5分	〈導入〉本時の流れを再確認する ・ワークシート配布。 ・座席のままで1班から発表していく。 ・クラス全体のディスカッションに備えて、聞いている人はワークシートにメモを取る。	〈導入〉 ・作品リストを前方に提示し、全体の見通しを持たせる。 ・ワークシートには単なる感想ではなく「古典と近代文学の連続／断絶」についての気づきや疑問点を書くよう指示する。
20分	〈展開Ⅰ〉1班～4班の発表 ・代表作品の紹介と制作意図の発表。 ・班員全員の前時の「話し合い」を紹介。 →クラス全体のディスカッション①	〈展開Ⅰ・Ⅱ〉 ・代表作品の紹介は班員全員で効果的に行う。 ・「話し合い」内容はプリントして全員に配布。 ・考察を深めさせるための視点： 人物の関係性／時空間の捉え方／社会背景／小道具／ 語彙／語りや視点／描写／色彩や音／比喩／象徴など
20分	〈展開Ⅱ〉5班～8班の発表 →クラス全体のディスカッション②	
5分	〈まとめ〉各自ワークシートを提出する	〈まとめ〉本時の気づきを書かせて提出。

4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

まず古典作品のリライトについては、生成 AI を活用したことで、古典が苦手な生徒も楽しんで意欲的に取り組めたようである。伊勢物語「東下り」を「自分の気持ちを伝えたい！」文章だと捉えて現代の SNS 形式に書き替えた作品や、「百人一首の和歌が大好きなので多くの人に親しめて空気感がふんわりしているヨシタケシンスケ風に」書き替えた作品等があった。当たり前のことではあるが、明確な意図やイメージを持ってリライトした作品に優れたものが多かった。

「古典と近代文学の連続性と断絶性」のディスカッションにおいては、その妥当性はさておき、生徒たちから以下のような意見が出た。(連)は連続性・共通点について述べているもの、(断)が断絶性・相違点について述べているもの。)

**内容面** (断)古典では身分社会であることから、登場人物の上下関係が重要で明確に書かれている。近代文学では状況説明が多くなる。(断)古典は時間の流れがゆっくりしている。現代は心理的な時間が外の時間より強い。(断)古典の方がノンフィクションが多く、近代文学はフィクションが多い。(連)恋心といった人の気持ちは昔と今で案外変わらないと感じた。(連)お話のテーマや教訓は現代に通じるものが多い。(連)ぼた餅や僧侶は現在も存在するので連続性がある。

**表現面** (断)古典は三人称的な語りが多く、近代文学は一人称の語りが多い。(断)古典は主語が省略される。語り手も不明確。(断)日本語の響きの感じが変化していて、和歌ならではの読んだときの心地よさのようなものが今の言葉に移すと失われる。(断)「ひしひし」等の擬音表現やオノマトペがかなり違う。(連)自然の景色に心理を投影する点は共通性を感じた。(連)言葉の響きやリズムを重視する点は古典も近代文学も同じだ。

授業後の振り返りシートでは「古典だと掛詞や縁語などに魅力を感じるが、現代風に書き換えるとその魅力が薄れてしまう。そこから古文にはどのような力があるのか疑問に思った。」「古典の表現技法が現代文に翻訳されたときに、表現の効果がしっかり残っているのか?」「古文は三人称的な語りが多いのはなぜか?」「時空間の捉え方に違いを感じるが、その背景にあるものは何か?」といった疑問が寄せられた。リライトしてみたことで、古典ならではの言葉遣いや修辞技法の魅力に気づけた生徒が一定数いたようである。また、古典世界の人々が世界をどう捉えていたのかという興味関心が湧いた生徒も多かった。評価は、下記ループリックに沿ってリライト作品および振り返りの記述を評価した。

振り返り記述から見て取れる生徒の変容としては、以下の二点が大きい。これらの変容が、今後さらに彼らの古典を学ぶ姿勢をどう変えていくか、継続的に見守って行きたい。

- (1)これまでまったくの別物と捉えがちだった古典と近代文学とを連続性のなかで捉えるようになった。
- (2)古典は現代に翻案すると味わいが変わってしまうこと、すなわち古典の表現には固有の価値があることに気づいた。

評価ループリック

育成する資質・能力		4	3	2	1
知識技能	生成 AI を適切に活用する力	3に加えて、生成 AI の出力を批判的に考察することができる。	2に加えて、生成 AI に自分の意図に沿ったプロンプトを入力することができる。	著作権侵害・個人情報漏洩・不正確な情報といった注意点に留意して生成 AI を使用できる。	生成 AI に、プロンプトを入力することができる。
思考判断表現	言語文化について自分なりの考えをもつ力	自分のものの見方・感じ方・考え方を深め、日本の言語文化について自分の考えをもてている。	リライトの過程や友人との話し合いの中で、日本の言語文化について自分の考えをもつことができている。	単元の問いを理解したうえでリライト作品を創り、活動を振り返ることができている。	単元の問いを理解したうえでリライト作品を創り、友人と共有できている。
主体的に取り組む態度	AAR サイクルを回す力	主体的に AAR サイクルを回し、単元の問いに対して自分の考えを持つことができている。	2に加えて、毎時の学習の振り返り(Reflection)に取り組んでいる。	学習の見通しを持ち、授業時間を活用して主体的にリライト作品を創作(Action)している。	学習の見通し(Anticipation)を持ち学習のプロセスをこなせている。

研究協議会

## 「物語で日本語の今と昔を考える」

提案者 国語科

助言講師 紅野 謙介

### 1. 本校からの提案

(古典)『伊勢物語』の「筒井筒」を扱った。『伊勢物語』の表現の簡潔さに注目し、登場人物の心情について生徒たちに想像させること、そして古語の意味や古文常識に着目することで、古文の読みが深まることを体感させることを目的とした。現代の小説を楽しむように古典を楽しんでほしい。正解を探すというよりは、どう読めるのか解釈を考えていく授業とした。前半は生徒の発言を利用して生徒を引っ張っていったが、後半は生徒自身に考えさせる活動を行った。

(近代以降の文章)「言語文化」という授業を古典と現代文の教員がそれぞれ担当しているため、全く違う科目に感じてしまう生徒がいる。そこで、既習の古典作品を近代小説にリライトするという活動を行った。この活動を通して、古典と近代以降の文章との連続性と断絶について探究することを目指した。生成 AI を用いてのリライトであったため、生成 AI の力の方に注目してしまう生徒が多くおり、古典と近代以降の文章の連続と断絶について視点を戻させる必要があった。

### 2. 協議会における議論

(古典)

- ・第2段落の段階で妻の気持ちを書いた場合と、第3段落まで読んでから妻の気持ちを書いた場合では、違いがありそうか。
- 第3段落まで読んで変化するのは「男の気持ち」の方ではないか。
- ・色々な意見を受容していたが、「他の男が来るのを待っている」と答えた生徒がいた。これに対してはどう考えるか。
- 妥当性を持たせられるとよい解釈になる。本文の言葉や状況を論拠として整合性を持たせる必要がある。
- ・ジェンダーバランスを考えながら「伊勢物語」の授業をするということについて
- 現状ではジェンダーを前面に出した授業はやりづらいが、社会的なことも盛り込んだ授業にはなると思う。

(近代以降の文章)

- ・リライトする中で、生徒たちはどんな他者と出会って、自分を深めていくのか。
- 他者との出会いが、人文学の最も基本的な営みである。現代文では他者と出会っている実感がある。古典はとにかく正確に読むことを意識しているので難しいが、今回リライトする中で他者と出会うような気づきを得た生徒もいた。
- ・リライトしたことで、「古典の文章のままのほうがよかった」という生徒も多かった印象がある。生徒の中に生まれしてきた古典の表現の面白さなどをどのようにしていくか。
- 古典の授業に生きてくるのではないか。古典だからこそその形式や文章の力を読み取らせたい。

### 3. 課題

本協議会では、「言語文化」の教員の授業の持ち方や、評価に関する議題があがった。本校では、もともと教員の専門性をもとに現代文と古典の担当を分けていたため、「言語文化」においても、「古典」は古典の教員、「近代以降の文章」は現代文の教員が担当している。現代文分野では、「言語文化」と「現代の国語」の授業において、融通がきくのでやりやすさもあるが、一方で生徒にとっては、教員が異なるからこそ、古典と現代文との間により断絶を感じてしまっているとも考えられる。評価については、本校では、定期考査は8割古典、2割現代文(主に知識・技能)という配点にしている。さらに、現代文でパフォーマンス課題を出し、テストとパフォーマンス課題の点数をバランスよくするように調整している。「言語文化」という授業において、教員をどう配置するか、どのようにして評価するかといったことは、今後も引き続き議論していく必要がある。

公開研 公開授業Ⅰ・Ⅱ

## SSH 地球科学 (地理分野) 「自然地形と防災・減災 ～ SSH 地球科学におけるハザードマップの活用～」

授業者 栗山 絵理

### 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～

本時の授業は、1・2学期の授業を通じて養ってきた「認知的に読む・書く・聞く・話す・データを活用する技能」を応用して、「新たな価値を創造する思考力・判断力・表現力を培う」ための実践的な授業として位置付けたい。ここでの「新たな価値」とは、地理院地図と実踏を活かして足元の自然地形を把握し、自然地形に由来する防災・減災に関する理解を「防災キャッチフレーズ」にまとめて発信することを目指すものである。

過去の知見では、河川周辺および旧河道は低地となり豪雨時には浸水しやすく、地盤が軟弱で地震時には揺れが大きく影響し、液状化の発生や建物の倒壊が誘発されやすいことが指摘されている。都市には暗渠化された水路が多く存在するため、その周辺地域についても内水氾濫や地震の被害を想定しておく必要がある。また、自然地形や地形の起伏の理解を応用して、避難場所からさらなる高台に避難したために津波の被害から逃れた事例もある。こうしたことから、日頃より地理院地図を活用し、生活圏の自然地形を五感で体得し、頭の中の的確なハザードマップを形成して、共に助かる行動を取れる力を生徒エージェンシーとして育成することを目標とする。

### 2. 単元計画

学習内容	時間数(延8週間)	事例地域	授業者
・自然地形について(自然地形の成り立ちと人間生活・変動帯)	・4時間	・地体構造の中の日本列島	・教育実習生
・防災について(火山・地震・津波・都市型災害など)	・4時間	・東北地方太平洋沿岸・阿蘇 ・首都圏・舞浜・ハワイなど	・教育実習生
・地図を活用した身近な地域の防災について	・8時間	・学校周辺 ・生活圏	・地理の教員

### 3. 公開授業の概要 ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

#### ①本時のねらい

・地理院地図を活用し、生活圏の自然地形を五感で体得し、頭の中の的確なハザードマップを形成して、共に助かる行動を取れる力を育成する。授業を受けることで、ループリックの4に到達するような仕掛けを作って提供する。

#### ②本時の授業展開

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
導入 (15分)	・校外授業にあたってのガイダンスを行う ・ルートの説明	・安全に留意して活動できるように注意を促す ・ルート上の注目すべき事柄を解説する (暗渠・旧河道・氾濫平野・斜面・台地・凹地・谷頭・標高・高低差など)
展開1 (60分)	・予め設定したルートを4人班で実踏する ・奇数班はルートを時計回り・偶数班はルートを反時計回りに回る ・生徒は目標物を撮影し、①高低差 ②水の存在(音・臭い・感触)に注目して歩く	・防災フォトゲイニングの手法を応用する
展開2 (10分)	・「自然地形>地理院地図」に撮影してきた写真をプロットする	・デジタル地図の活用技能を応用する

まとめ (15分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3つ公園の自然地形の違いを地図から読み取る</li> <li>・ 班ごとに防災キャッチフレーズを作成する</li> <li>・ 防災キャッチフレーズの発表</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3つの公園が立地する自然地形と災害リスクを整理し、獲得した知識や理解を一般化するように促す</li> </ul>
--------------	---	---

単元を通じた評価基準

育成する資質・能力		4	3	2	1
観点	持つべき視座				
知識技能	認知的に読む・書く・聞く・話す・データを活用する技能を向上させる(変革をもたらすコンピテンシー)	自然地形から災害リスクを読み取って抽出し、防災関連施設を方位や数値で示すことができる。	自然地形から災害リスクを読み取って抽出し、防災関連施設を具体的に例示できる。	デジタル地図・GISを活用し、自然地形から災害リスクを読み取って抽出できる。	デジタル地図・GISを活用し、目的とする主題図を添付するのみ。
思考判断表現	新たな価値を創造する思考力・判断力・表現力を培う(新たな価値を創造する力)	災害発生時に取るべき行動を、3か所以上について考え、複数の災害リスクを想定して共助の減災案を提案できる。	災害発生時に取るべき行動を、3か所以上について考え、複数の災害リスクを想定して自助の減災案を提案できる。	災害発生時に取るべき行動を、3か所以上について考えることができる。	災害発生時に取るべき行動を、1つの場所についてのみ考えている。
主体的に学習に取り組む態度	自己の学びが世界に+の影響を与え得る心身の健康に寄与する(責任ある行動をとる力)	授業で学習した内容を身近な地域に応用して考察し、家族など身近な他者と共有して話し合うことができる。	授業で学習した内容を身近な地域に応用して考察し、他教科の学習内容とも結びつけることができる。	授業で学習した内容を身近な地域に応用して考察できる。	授業で学習した内容をプリントに加筆して提出するのみ。

4. 公開授業を受けて ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

公開授業では、地理院地図を用いて自然地形分類と標高差を示した主題図の関連を確認し、8箇所の防災関連設備の所在地をルート順にまわって、ルート上の起伏を体感してもらった。授業で工夫した点としては、フォトログイニングの手法を応用して、位置情報のついた写真を撮影してくれることを指示した。エージェンシーに関連して、学外からの参観者と共にグループワークとして実踏を行ったことで、学校所在地の生活圏に「責任ある行動をとるコンピテンシー」の育成を試みた。各班で学校周辺の3か所の公園の自然地形を確認し、地震と豪雨に対する災害リスクを表にまとめ、地理院地図の自然地形分類をハザードマップとして活用できる技能と思考力・判断力を伸長し、防災キャッチフレーズを考察することで表現力の向上を目指した。実体験を伴った授業展開は生徒・参観者共に好評であった。

今後の課題としては、共助の視点を一層伸長すると共に、公助にも提言・提案できる活動を授業に取り入れて、学校所在地についてエージェンシーが発揮できるようにしたい。また、台地上に位置する本校が「広域避難場所」に指定されていることを周知し、生徒発案の避難訓練の企画・実施や防災関連設備について世田谷区へ提言を実施したい。

5. 引用文献

宇根 寛 (2021) 『地図づくりの現在形 地球を測り、図を描く』, 講談社.  
 鈴木康弘編 (2015) 『防災・減災につなげるハザードマップの活かし方』, 岩波書店.

研究協議会

## 「ハザードマップを信じるな？」をどう伝えるか

提案者 地理歴史科・理科

助言講師 宇根 寛

### 1. 本校からの提案

「防災」は、教科を横断する重要な学習テーマであり、現行の『学習指導要領』では地理歴史科・理科のみでなく、保健体育科や家庭科などでも取り扱うことになっている。地理歴史科と理科に共通する防災に関する学習事項として、自然地形の成り立ちや自然災害の発生のメカニズムを科学的に理解し、地図を活用して現在地において発生しうる災害に備える思考力・判断力を養うことが重要である。そこで、「地理院地図」の自然地形分類をハザードマップとして活用するコンピテンシーを養う授業を提案する。

### 2. 協議会における議論

協議会では、「地理と他教科の連携」「GIS・ICTの活用とフィールドワーク」「中学校と高校の連携・差異化」の3つが中心に議論された。第1の「地理と他教科の連携」では、地学との融合、地学以外の他教科との連携、歴史との連携が議論された。地学との融合では、液状化現象をテーマに、地理では事象の影響を説明し、地学ではペットボトルを使った実験を行うなど、分野横断的なアプローチを実践した。土地の成り立ち（武蔵野台地、扇状地等）や氷期・間氷期の海面変動といった地学的な視点を加えることで、なぜ台地が安全で低地が危険なのかという根本的な理解につながるという点が指摘された。地学以外の他教科との連携では、地理総合において家庭科（備蓄）、生物、保健体育など他教科とも連携できる可能性が示された。また、歴史との連携では、過去には、歴史（古文書読解）と地学（火山灰実験）のチームティーチングで富士山の宝永噴火を扱った実践例も共有された。

第2の「GIS・ICTの活用とフィールドワーク」では、GISツールの活用、AR（拡張現実）の活用、フィールドワークの重要性が議論の中心となった。GISツールの活用では、地理院地図は、レイヤー機能や標高確認、複数地図の比較機能があり、生徒が応用力を身につけるうえで非常に有効なツールであると評価された。実践例として、生徒のスキルレベルに応じて地理院地図、わがまちハザードマップ、Google Earth等を分担させ、避難場所選定を行う授業が紹介された。AR（拡張現実）の活用では、スマートフォンのAR機能で浸水の高さを視覚的に体験させる授業も、生徒のイメージを喚起する上で効果的であるとされた。フィールドワークの重要性としては、高校生段階では、地図読解力を高めるために実際に歩いて地形や距離感を体感し、地図と照らし合わせる反復作業が重要であると確認された。

第3の「中学校と高校の連携・差異化」では、高校での発展として、中学校での学び（防災マップ作り等）を基礎に、「①地域、関東、日本列島などスケールを変え、マルチスケールな視点で地形と防災を捉え一般化する」「②アナログ地図の読解力を基礎に、GISなどのデジタルツールを本格的に活用する」「③単なる共助の理解に留まらず、具体的な提言レベルまで考察を深める」の3点が高校では重要とされた。また、高校の地理総合における地域調査が、中学校での実践と差異化できず、体験活動に留まりがちであることが課題とされた。

### 3. 課題

今後の課題として6つの点が挙げられた。1つ目に「授業目標の達成度評価」で、発展的な授業目標（防災情報の統合と一般化）の達成度を具体的に評価し、未達成の生徒へのフォローアップを検討する必要がある。2つ目に「地学融合授業の評価基準策定」で、SSH地球科学における融合授業の成果を測るための評価基準を策定する必要がある。3つ目に「遠方在住生徒へのアプローチ」で、学校周辺の防災学習に対し、遠方から通う生徒の当事者意識をどう醸成するか、具体的な働きかけを検討する必要がある。4つ目に「中高連携の具体化」で、中学校での学びを高校でどう発展させるか、具体的なカリキュラムレベルでの連携計画を策定する必要がある。5つ目に「教員の防災意識向上」で東日本大震災での大川小学校の判例で示されたような高度な防災意識を教員が身につけるための研修や支援体制を検討する必要がある。6つ目に「生徒へのフィードバック」で、生徒の主体性（エージェンシー）を評価し、その結果を具体的にフィードバックする手法を確立し、共有する必要がある。以上の6点を引き続き検討していく。

## 公開研 公開授業 I・II

## SSH 地球科学 「生活文化と地球システム ～ SSH 地球科学による教科融合の観点より ～」

授業者 授業 I 地学 齋藤 洋輔  
授業 II 地理 松本 至巨

## 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーを育むカリキュラムとその評価～

本公開授業においては、公開授業だけではなく単元単位、そして SSH 地球科学のカリキュラム単位で生徒エージェンシーを育みたいと考える。具体的には、授業 I の地学分野の「大気・海洋」の単元においては、地球システムという概念の獲得を通して、自分と地球のつながり（システム）を意識させたい。このような概念習得の学習を通して、生徒には「新たな価値を創造する力」を発揮するための基礎を形成してほしいと考える。

次に、授業 II の地理分野の「生活文化の多様性と国際理解」の単元においては「課題自体を認識し、対立に対処する力」の育成を目指している。世界各地のさまざまな地理的環境によって、人々の生活文化は地域ごとに独自性を持ち、多様性に富むことを学習することで、自他の文化を尊重し、国際理解を図りながら共存していくことの大切さや新しい関係、新しい社会の在り方を創造できるようになると考えられる。

## 2. 単元計画

SSH 地球科学の単元計画において、地理・地学で類似する学習内容を並列させて、連携的にすることはできたが、融合的なカリキュラムをつくるには至らなかった。授業 I の地学分野の「大気・海洋」では、反転授業を組み込みながら、授業を進めた。「大気圏の層構造」や「大気組成」の基礎的な学習から始まり、本単元で最も中心的に扱う「地球の熱収支」の内容に移った。太陽放射や地球放射の特徴を、熱収支の図を使って理解を深めた。その上で、これまでの学習内容を包含する意味で「地球システム」の内容を取り上げた研究授業の提案を行った。その後には、「大気の大循環」の学習を進め、そこに熱収支・放射平衡も絡めて、さらに理解を深めた。

授業 II の地理分野の「生活文化の多様性と国際理解」では、「大気の循環」や「気候の地域性」について学んだ上で、「ケッペンの気候区分」を取り上げ、各区分の雨温図やハイサーグラフについて学んだ。そして、「熱帯、乾燥帯、温帯、亜寒帯・寒帯の自然環境と生活」として、それぞれの気候の特徴と生活文化について学んだ。

## 3. 公開授業の概要 ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

授業 I の地学分野では、地球システムという概念を理解し、これまでに学習してきた熱収支との関連性について考察できること、地球システムや熱収支の概念の根底にある“地球科学的な時間の流れ”についても気づくことを目的として本時を実施した。まず、反転授業の予習動画の復習として、地球システムやアルベドについて確認した。その後、本時のテーマである地圏から大気圏・水圏の影響として、「火山噴火」を取り上げ、その影響を熱収支の図を用いて考察した（図 1 参照）。また、班ごとに話し合い、各自で 100 字の文章にまとめた。その後、それらの文章を 2 人組で互いに評価し合った。最後に、「曇りの日」と「火山噴火」の場合の、熱収支上の差異について班ごとに議論し、考えを発表させ、「地球科学的な時間の流れ（火山噴火の影響が生じる時間の急さや、影響の継続時間）」の要素について議論を深めた。

授業 II の地理分野では、熱帯気候の特徴を、分布や大気の大循環をもとに考察し、熱帯気候という環境下における生活文化や農業の特徴を理解することを目的として本時を実施した。まず、授業の導入として、熱帯雨林気候（Af）とサバナ気候（Aw）の植生の違いを図にするとところから始めた。その上で、両者の景観写真を提示し、景観の違いから気候の違いを考察させた。そして、それらの気候の形成要因について議論・発表させ、気候の違いが生じる要因

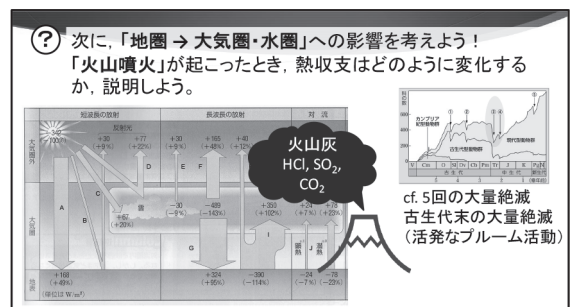


図 1 授業 I における発問

を理解させた。その上で、熱帯における生活文化として、環境に合った住居や農業・農作物について考えさせた。

4. 公開授業を受けて～単元における生徒の変容と今後の課題～

授業Ⅰの地学分野では、100字での作文をパフォーマンス課題に設定した。評価の観点としては、思考・判断・表現の項目とし、論理的に文章を表現することについて、4段階のルーブリックにて評価した。その結果を示したものが図2である。評価2を“最低限到達してほしいレベル”と設定しており、クラスの9割以上が、評価2以上に達していた。その意味で、授業Ⅰでは授業の目的としていた熱収支との関連性については考察することができたと言える。一方で、“地球科学的な時間の流れ”については、授業のまとめとして、火山噴火が縄文文化を減らした事例について授業者が言及し過ぎてしまった。そのため、課題として評価するには至らず、この点は公開授業の課題として残った。

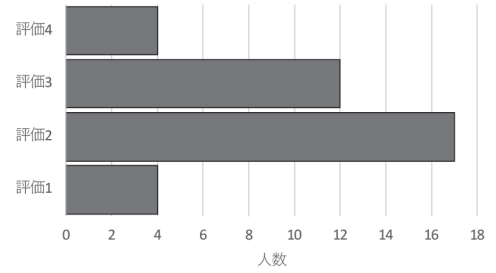


図2 授業Ⅰにおける課題への評価の分布

授業Ⅱの地理分野でも、熱帯気候と日本との相違点や共通点を確認し、地域の生活文化の多様性を尊重することの大切さについての認識を深めるパフォーマンス課題を設定したが、こちらも授業時間の関係から評価するには至らず、この点は公開授業の課題として残った。

次に、SSH地球科学のカリキュラムを通して、生徒たちはどのように資質・能力の変容について実感しているのか、アンケートの結果から見たい。次に示した図3のように、8割近くの生徒が資質・能力の変容について前向きに捉えているが、中でも「問題を解決する力」、「粘り強く試行錯誤する姿勢」、「協働する力」で割合が大きかった。SSH地球科学のカリキュラムにおいては、これまでも多くのパフォーマンス課題が設定されており、粘り強く問題解決する学習場面や、グループで活動する学習場面を生徒たちは想起したようである。「エージェンシー」についても同様の傾向が見られたが、今後のカリキュラムづくりにおいては、図4に示した、秋田・松田（2025）による5つの視点を踏まえて、SSH地球科学のカリキュラムの中で生徒エージェンシーを育てていきたい。

最後に、どのように意識を持っているのかをアンケート結果から見たい。1学期末と2学期末での変化の様子を示したものが図5である。2学期に入り、地理・地学で類似するように授業内容の順序を整理したことで、お互いが補完的に作用させることができた。図5やアンケートの自由記述からも1学期以上に連携できた様子が把握できた。しかし、教科横断的な学びとまでは達していないという否定的な意見も見られ、今後のカリキュラムづくりの課題も把握することができた。

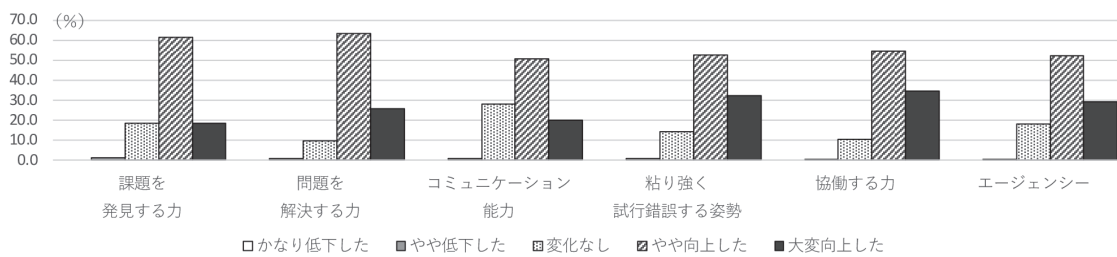


図3 SSH地球科学における資質・能力の変容

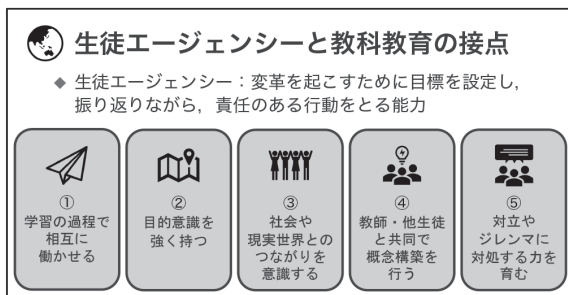


図4 生徒エージェンシーと教科教育の接点

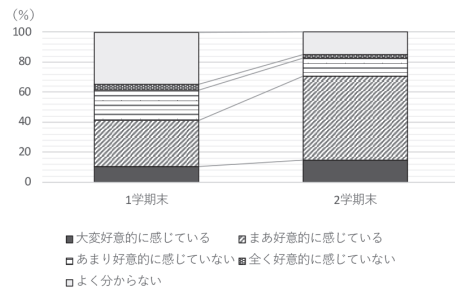


図5 教科融合への意識の変化

5. 引用文献 秋田喜代美・松田恵示（2025）教育におけるエージェンシーの概念と実践，pp.74-89，長肆クラルテ

研究協議会

## 「学校設定教科『SSH 地球科学』の課題と可能性」

提案者 齋藤 洋輔, 松本 至巨

助言講師 久田健一郎, 秋本 弘章

### 1. 本校からの提案

本校では、今年度より1年次の「地理総合(2単位)」と「地学基礎(2単位)」を融合させた学校設定教科「SSH 地球科学(4単位)」を開設した。本教科は「地理・地学 2.0」をスローガンとし、「教科×教科×社会課題(探究)」をコンセプトに掲げている。具体的には、授業内容を学習する時期を揃える「連携型」の運営を行い、科目を超える形でのパフォーマンス課題を設定することで学習の転移を促している。公開授業においては、授業Ⅰ(地学分野)では「地球システム」という地圏・大気圏等の学習内容を統合できる概念を軸に、時間・空間スケール、循環・フィードバック等の概念を内在させた授業を展開した。授業Ⅱ(地理分野)では大気の大循環等の科学的理解を応用し、自然環境と生活文化の関わりを「国際理解」の観点から考察させた。これらの取り組みを通じて、普段の授業を社会課題にシームレスに接続し、社会課題を「自分ごと」として考えるきっかけとし、生徒エージェンシーを育むことを目指している。

### 2. 協議会における議論

#### (1)地球システム概念と授業構成

地学で扱う「地球システム」という概念に対し、高一生にとってのつまづきやすさはないかとの質疑があった。これに対し、本概念は物理・化学が前提とする閉鎖系とは異なる特異性を持ち、つながりを意識させるきっかけとして導入しているとの説明がなされた。また、反転授業の導入により、教科書の全コンテンツを対面で扱う必要をなくし、授業を活動中心に転換する工夫も報告された。

#### (2)評価のあり方とルーブリックの活用

年間を通した評価やルーブリックの指導頻度について質疑があった。課題提出時には必ずルーブリックを付し、生徒が「モデル」を意識して記述できるよう指導していること、相互評価は2学期後半から導入していることが回答された。

#### (3)生徒エージェンシーの育成と教科融合

地理と地学の融合の見通しや、多文化尊重を促す工夫について質疑があった。地理は「コンテンツ的にカリマネの中心にあるべき科目」であるという発言があったり、地学より社会課題に近い位置にある地理との融合は、生徒エージェンシーを育む上で有効であるとの認識が示されたりした。見方・考え方の違いを意識させることが多角的な視点につながり、学ばせやすさを教科の枠を超えて実感させることが重要であるとの意見が共有された。

#### (4)助言講師からの所感

助言講師からは、日本学術会議の提言を引用し、横断型かつ生涯にわたる「地球教育」の重要性が語られた。地理と地学は扱う現象の出発点が同じであり、専門分化された学問を現代的課題の解決に向けて再び統合する本試みは、極めて親和性が高いとの指摘があった。

### 3. 課題

本協議を通じて、今後の課題として以下の3点が明確になった。第一に、現在は時期を揃える「連携」の段階にあり、今後は評価方法の共通化を含めた「融合」のレベルをさらに高めていく必要がある。第二に、「SSH 地球科学」と生徒個人の「SSH 探究」を相互に駆動させる仕組みのアップデートである。具体的には、マイクロプラスチックの空間分布や皿状構造の再現実験といった探究活動の成果を、いかに次の授業教材へ還元し、社会課題を「自分ごと」にする仕掛けとして定着させるかが問われている。第三に、システムの持続可能性である。教員の属人的な熱意や勤務時間を越えた議論に依存せず、教材を適切に蓄積し、勤務時間内で運用可能な組織的体制を構築することが求められる。次期学習指導要領を見据え、地理探究等とのカリキュラム整理を継続し、社会課題と接続する深い学びを追求していきたい。

公開研 公開授業 I・II

## 国語科・数学科 「論説文を数学で読む」

授業者 国語科 日渡 正行  
数学科 荻原 洋介

## 1. 研究主題との関わり ～ 生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか ～

不確定性の高いこれからの時代で要求されるのは、専門的な知識だけではなく、幅広い経験を統合した分野や枠にとらわれない知恵である。しかし、学校の授業が科目ごとに構成され、そこで評価もされる以上「枠」が自然に形成されてしまい、その中で考えることが増えてしまう。今回の授業では、その枠組みを壊したり、新たに自分で作ったり、枠を越えることの1つの機会を作り、枠組みが絶対的なものではなく、自らが枠について扱うことへの気づき（成長マインド、変革をもたらすコンピテンシー）に繋がることを大きな目的としている。

## 2. 単現計画

全2回の特別な授業である。「国語」「数学」ともこれまでに学ばせてきたことを活かしながら、「東京の空間人類学」を読解させる。1時間目で国語的な読解を示したうえで、具体的な例（ここでは、学芸大学という街）を通して文章に対する理解を深めさせる。本文では「人為的」と「生活に根ざした」ものとして都市を大別するが、その際、数学の集合を意識して教員が読みを導く。2時間目では、文章中の言葉や定義を表にまとめさせることによって、文章の論理的な流れを掴ませる。そのような授業を実践したのちに、生徒の読み方の意識を振り返り、教科の枠を越える可能性を考えてもらう。

## 3. 公開授業の概要 ～ 生徒エージェンシーの育成の観点から ～

育成する資質・能力		4	3	2	1
観点	持つべき視座				
知識技能	変革をもたらすコンピテンシー（数学と国語の融合を理解し、そこから発展的な読みの可能性を考える）	数学と国語の融合の意義について自分のものとし、他の教科や科目との融合の可能性にも結びつけることができる。	数学と国語の融合の意義について考えることができ、自分のこととして取り込むことができる。	数学と国語の融合の意義について考えることができる。	数学と国語の融合について意識している。
思考判断表現	課題自体を認識し、対立に対処する力（示された意見をきちんと理解しながら、ものごとを掴みとる方法を自ら模索する）	都市形成という属性について、本文を踏まえながら、根拠をもって分類することができる。	都市形成という属性について、根拠をもって分類している。	都市形成という属性について、自分で考えて分類している。	都市形成という属性について、分類を試みている。
主体的に学習に取り組む態度	AARサイクルを回す力（主体的に振り返り、自己を改善しようとする態度）	生徒が主体的に、AARサイクルを回すことができる。	生徒が教師の支援を得て、AARサイクルを回すことができる。	教師の指示に従って、生徒がAARサイクルを回そうとしているが、途中の段階である。	教師が指導したが、AARサイクルを回そうとしなかった。

『東京の空間人類学』の考えに沿ってオープンエンドな形の問いで学芸大学の街説明することを、3人～4人で1グループとして考えさせた。これは東京という生徒にとっても身近（と思っている）な存在に対して漫然と文章を読むのではなく、日頃の学校生活でさらに身近なはずである学芸大学に、文章の考えを適用することで筆者の主張について読解を深めることが第一義にあり、数学で言えば定理を具体的な例に当てはめて考えることに酷似している。現在の学芸大学は、住宅や商店街で構成されているため「生活に根ざした」ものと考えられるが、当初東京学芸大学を設置したことに由来するため、大学の設置者が国であることから為政者による「人為的」なものであるという意見が出てきたり、歴史に目を向けて前身である青山師範学校やその時代のこと、さらに遡って江戸時代に幕府の鷹を預かる場所（学芸大学という地名はなく正式には鷹番という）として始まったことから考察したりするところなど様々なアプローチがあった。

1時間目の問いの設定には、『東京の空間人類学』にもある外国からの影響がほぼないと考えられる場所を例にしたが、2時間目は横浜にすることで外国からの影響についても考えられる都市について考えることとした。1時間目の議論や教員からの話を踏まえ、2時間目の解釈については1段階深まったようでもあった。横浜になると多くのグループが歴史も含めて横浜を説明しようとしていた。

#### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

国語と数学の連携ということで生徒自身も興味は高かったようで、授業終了前の生徒へのアンケート結果でも「ベン図やカルノー図を利用して文章を整理するところが新鮮であった」などの意見が多かった。また、「国語と数学の連携は可能か」という問いに対しては、できると思うが69.4%、できないと思うが30.6%であった。できないと思う代表的な意見は「国語は解釈がいくつもできるが、数学は結論が一通りであるから」や「文章を綺麗に分類しきれない（数学の集合の対象にすることが困難である）」などがあつた。教材研究をする段階でも、歴史的変遷などを数学的に整理することは難しく、これらの指摘はもっともなことであるが、その反面「新たな視点や考え方を得られた」などの意見も多く、生徒の視野を広げる契機にはなった部分もある。

また、今回は「町」について考えるということもあり、「地理」とのつながりを考えている生徒もいた。また、本校で実施している「地理実習」の経験もあってか、地図を調べて考察しようとするグループもあつた。これは、「数学」「国語」の連携がさらに広がりを見せているということであり、教科連携のさらなる可能性を示すものであつた。しかしながら、地図や土地利用といった地理的観点で見えていくということは、「国語」「数学」としての焦点がぼやけてしまうことでもあつた。さらなる教科連携の方向性を探りつつも、「国語」「数学」の連携に絞ることができる教材を求めるとも必要となる。

今回の授業の評価については、後半の横浜に主軸を置いているが、多くの生徒が外国からの文化の流入なども含めて都市を捉えようとしており、ワークシートでも全体の8割以上が評価としては3～4である。また、今回の授業では教員が解釈の方法などについて指針は当てているが、それを踏まえてグループで主体的に取り組む姿勢は見せていた。ただし、時間の関係もあり「自己を改善しようとする態度」の部分にまではたどり着くことができず、評価としては3が大半を占める形となった。

#### 5. 引用文献

- [1] 陣内秀信、『東京の空間人類学』、ちくま学芸文庫、1992
- [2] 霜栄、『現代文の読解力開発講座＜新装版＞』、駿台文庫、2011

研究協議会

## 「論説文を数学で読む」

提案者 国語科 日渡 正行, 数学科 荻原 洋介  
 助言講師 国語科 千田 洋幸, 数学科 成田慎之介

### 1. 本校からの提案

生徒が国語科の課題である文章解釈という幅広い問いに対して、数学の論理などを用いて協働的に課題解決することを目指し、その過程に出る内容を集合や論理を用いて整理し深める力（共同エージェンシー）の育成を目指す。

### 2. 協議会における議論（・：質疑，→：応答）

- ・この文章を選んだ理由は何か？ →長くない論説文であり、最初に読んだときにじっくりときたため。
- ・連携の必然性は何か？ →必然性というわけではないが、学校の学習では教科という人為的な枠がつけられているため、その枠を外して本来の不可分な姿にしようと考えた。今回は数学が思考ツールとして役立つと考えた。
- ・エージェンシーをどのように評価するのか？ →ワークシート、授業の感想やアンケートを基にする。
- ・今回の課題は地理や歴史に関するものであり、社会科との連携が必要だったのではないかと。それにより、国語要素と数学要素もそれぞれ弱くなっていた。「大別」の解釈が筆者の意図と合っていたのかを検討する必要があるし、集合を持ち出すならもっと条件をしっかりと考えないといけないのではないかと。→まずはコンテンツフリーに国語・数学の連携を考えていたため、社会科との連携の必要性に気付くのが遅かった。

(成田先生からのご指導)

- ・かなり挑戦的な実践だった。「数学を使うことでうまく整理できるのか」が研究授業の問いであったと解釈している。趣旨としては、集合とか命題で整理するとあったが、生徒たちの様子を見ていて教師の「納得できる？」に対してシーンとしており、今日の授業を見ていて、文章を数学で読解する・整理するということがどのくらい有効なのかということが気になった。数学的には、集合をつくるということは、その集合に属する・属さない要素をはっきりするということが、こういったときにこの集合の要素は何になるのか。今回の文章では、集合で考えると逆に分からなくなってしまった。
- ・文章を数学で、集合で読解することは難しい。文章を読む・作る時には、主張(命題)をはっきりさせて、その根拠(証明)を述べる。主張と根拠という見方なら数学的な見方でみることができるとか。そのぐらいが限界ではないか。
- ・今回の連携のアイデアとして、小林先生が昨年仰っていた事象・テーマ、技法・スキル、概念のうち、概念での論理があるのではないかと。IBではTheory of knowledgeがある。論理とは何かを議論できたかもしれない。先日参観した倍数判定法の授業では、生徒が「4で括れるなら4の倍数、逆に4で括れないなら4の倍数ではない」ということを言っていた。数学の場面でも日常用語としての「逆」を用いていた。
- ・附属の研究授業は、学習指導要領、実践面や学術的研究への提案に資するものであってほしい。

(千田先生からのご指導)

- ・国語は言葉を扱うため教科連携がしやすい。特に表現系の科目との連携がやりやすいが、数学との連携は少ない。
- ・カテゴリーに分けるという数学的な分類を我々は日常的に行っているが、どういう場面で数学的思考をしているかなどを生徒が緻密にメタ認知できる場面、自己評価する場面が必要だった。アンケートでの感想は単純なものが多かった。
- ・二項対立の説明文だった。最初の二項対立が最後まで続くものではない。脱構築されるはずで、生徒もそうなることを分かっていたのではないかと。集合を使って整理するなら、二項対立を掴みづらい複雑な文章が合っていた。
- ・三角ロジック、アブダクションなどの思考法をいかにつかって説明文を読むかも考えられている。数学的思考とは無縁ではないと思う。どちらも記号を使って、現実世界から抽象化された世界を使う。国語と数学には連携の可能性はある。

### 3. 課題

教科連携に関して、教材研究を深めることで、適切な連携教科・科目を見つけていくこと。また、附属学校として学習指導要領、実践面や学術的研究への提案に資する研究を行っていくこと。

公開研 公開授業 I

## 数学・理科 (生物) 「がん検診をすすめるか？」

授業者 数 学 科 青山久美子  
理科(生物) 小境久美子

### 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～

本実践は、生徒が科学的根拠をもとに意思決定をし、責任ある行動を選択する「エージェンシー」の育成を目的とした取り組みである。「家族にがん検診をすすめるか？」という自分ごとの問いを起点に、数学と生物の教科横断的な学習を位置付け、検査精度、罹患率、年齢差といったデータを扱いながら、生徒自身の判断を深めていく構成とした。また、単に数値を比較するだけでなく、その数値の背景にある生物学的メカニズムや社会的な文脈にも踏み込むことで、「なぜこの結果になるのか」を理解しながら判断できるようになることを目指した。

本校の「羅針盤モデル」が重視する「目的意識」および「自己効力感」に着目し、学習内容を自分や家族の未来と結びつけて考えられるように設計した。特に、数学では条件付き確率（陽性的中率）の計算と意味づけ、生物では罹患率の変化や検診対象年齢の根拠を扱い、両者を統合して判断の根拠を構築する探究的な学習を促した。生徒が主観的な印象ではなく、科学的データとその背景を理解した上で意思決定する姿を目指した取り組みであり、正解のないテーマに向き合う際の「学び続ける態度」を育むことも意識した。

### 2. 単元計画

本実践で扱う内容はすべて既習範囲に含まれる。数学 I 「データの活用」は 1 年次 9・10 月、数学 A 「条件付き確率」は 1 年次 6 月、生物基礎「体細胞分裂」は 1 年次 7 月に学習している。本実践は、既習内容を接続しながら教科横断を試みた試行的な位置づけである。本校では総合的な探究の時間として 1 年次に 1 単位、2 年次に 2 単位を配置している。

一方で、教科連携を前提とした単元計画は十分に確立できておらず、研究協議会でも継続的な課題として挙げられている。今後は単元全体を見通した学習デザインの構築や教科間で共通に扱う概念の整理が求められる。

### 3. 公開授業の概要 ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

前時に行った「家族にがん検診をすすめるか？」に対する事前調査では、多くの生徒が「がん検診は早期発見・早期治療のために受けるべきである」と回答していた。1 学期の数学 A の授業で扱った題材により、「陽性＝病気ではない」という直感とのずれを経験していたこともあり、本実践での数学パートでは、有病率・真陽性率・偽陽性率の違いが陽性的中率に大きな影響を与える点に着目し、検査結果の解釈を再考する姿が見られた。特に、「若年層では陽性的中率が低い」という事実が驚き、検診の意義を問い直す生徒も見られた。数値が示す「リスクの見え方」が年齢によって変わること気づくことで、生徒の理解はより実感を伴ったものとなった。

生物パートでは、「がん細胞とは何か」から入り、発がんのメカニズム、年齢と罹患率の関係、検診による早期発見と予後改善の関連を扱った。その結果、生徒の「陽性的中率が低いとしても、検診を受ける価値は高い」という視点が新たに生まれた。数学的な疑問に対し、生物学的背景が補足され、学びが往復する構造となった。また、生徒の中には、年齢によるリスクの差や一次検診・二次検診の役割の違いに関心を広げる姿も見られ、検診をめぐる意思判断への理解が多面的に深まった。

最後に事前調査と同じ質問を投げかけ、数学的・生物学的根拠をもとに、自分の立場で「すすめる／すすめない／どちらともいえない」を選択し、理由を論理的に表現した。生徒が自分の判断に責任を持って向き合う姿から、エージェンシーの芽を確認することができた。

#### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

本実践では、授業の前後で「家族にがん検診をすすめるか？」という同じ問いを提示し、「すすめる／すすめない／どちらともいえない」の3つの選択肢の中から選び、選んだ理由を記述させた。理由の記述内容を次表のルーブリックに基づいて評価した。

育成する資質・能力		4	3	2	1
観点	持つべき視座				
思考 判断 表現	課題自体を認識し、対立に 対処する力 (「検診をすすめる／すすめない」という正解のない問いに、根拠をもって自ら判断しようとする力)	データや生物学的知識を多面的に統合し、自分の考えを論理的かつ説得力をもって表現できる。	陽性的中率や有病率などの根拠を用いて、自分の考えを論理的に説明できる。	結論を述べることはできるが、根拠や論理がやや不十分である。	判断を表現できず、根拠の提示や論理性に乏しい。

37名の回答の分布は、4:1名、3:11名、2:20名、1:5名であった。評価2の数が多かったことで、多くの生徒が陽性的中率の低さに関心を示してはいるものの、数学的根拠と生物学的背景を統合した記述は少なく、両教科の接続が十分に言語化されていないことが明らかになった。その一方で、一次検診と二次検診の特性に言及し、検査プロセス全体を踏まえた判断を示す記述も見られ、授業中にいくつか提示した問いを受けて思考を深めた生徒も存在した。

また、授業実践後に記述した振り返りについても同様に、次表のルーブリックに基づいて評価した。

育成する資質・能力		4	3	2	1
観点	持つべき視座				
主体的 に学習 に取り組む 態度	責任ある行動をとる力 (科学的根拠に基づいて、自分や家族の健康に関わる判断や行動を構想する態度)	学習したことをもとの、自分や家族の健康を振り返り、具体的な行動変容を構想している。	学習内容と自分の生活を結びつけ、検診の必要性に気づいている。	学習内容に関心を示し、生活への結びつきに気づき始めている。	自分の生活と学習内容との関連に関心が薄い、または行動に結びついていない。

30名の回答の分布は、4:3名、3:9名、2:18名、1:0名であった。評価によらず、「内容が難しかった」という記述が多く見られた。これは、1時間の授業の中で扱った知識・情報量の多さが影響したと考えられる。一方で、自分や家族の将来の健康への意識を述べたり、科学技術の発展に目を向けたりする記述も見られた。学習内容の理解は得られていても、若年層にとって「がん」を自分ごととして捉えることについては一定の心理的距離が存在する可能性が示唆された。

研究協議会

## 「データや科学的知見をもとに行動変容を促す」

提案者 青山久美子 小境久美子

助言講師 長尾 篤志

### 1. 本校からの提案

本研究大会のテーマである「生徒エージェンシー」を育むために、本校としてどのようにアプローチしていくべきか羅針盤モデルが示されている。このうち、「自己効力感」については、昨年度本校生徒のアンケート調査で他の項目より低い結果となった。自己の学びが世界に影響を与え得るかを考えるにはまず、実社会とのつながりを意識することが必要である。本授業で扱った題材の「がん検診」は生徒自身や家族、周囲の人にとって身近なもので、自分ごとの問いを出発点とした学びとなることが期待できる。教科教育におけるエージェンシーの育成の接点として考えられるものには、学習過程で相互に働かせる（学習プロセス）、目的意識を強く持つ（動機付け）、社会や現実世界とのつながりを意識する（文脈）、教師・他生徒と「共同で」概念構築を行う（共同）、対立やジレンマに対処する力を育む（SSI）の5つのポイントがある。このうち、社会とのつながりについては本授業で意識させることができたと考えられるが、他の点については扱うことが難しかった。

本公開授業の前に4回の授業実践を行い、生徒からの感想および参観した教員からの助言を得た。意見としてあがったものは、「知識はたくさん得られているが、そこから行動変容できるのか」「生徒どうして議論する場面が少ない」「データから何が言えるのかを整理する時間が必要なのではないか」「がん検診をすすめるかすすめないかについての対立・ジレンマがない」といったことなどであった。公開授業では、生徒どうして議論する時間をわずかながら設けたが、1時間では議論が深まらなかったところもあった。

### 2. 協議会における議論

協議会参加者からは次のような質問が挙がり、公開授業や事前の授業実践から授業者が考えたことを回答した。陽性的中率を扱っていたが、がんに関する他のデータを扱うという候補はあったのかどうか。がんの転移の速さや転移したときにどのような症状が生じるかといったことを提示した方が生徒の判断材料になるのではないか。数学の立場から考えて陽性的中率が低いと検査を受ける意味がないと考えられ、生物の立場から考えるとやはり検査の意義がある、ここでジレンマが生じることがあるのではないか。陽性的中率に最も影響を及ぼす要因は何か聞いた際に、有病率ではなく、「偽陽性率が最も影響を与える」という声が生徒からあがっていた。値を変えるエクセルシートなどでシミュレーションをするとわかりやすいと感じるがどうか。がんのスクリーニング検査としては陰性的中率を上げることに重点が置かれるのではないか。家族にがん検診をすすめるかというテーマであったが、家庭環境は生徒によって様々であり、検診を受ける・受けないといった個人的なこと、特に感情も入るようなことを授業で扱う際に注意することは何か。授業前と後の「がん検診をすすめるかすすめないか」で意見が変わった生徒、特に「どちらとも言えない」と答えるようになった生徒の理由はなんであるか。

助言講師の長尾先生からは、特にエージェンシーの育成と教科連携についてご助言をいただいた。エージェンシーについては、「よりよい社会を目指して主体的に行動する力」であると考えている。羅針盤モデル中にもあったAARは目標を立て、計画を立てて、それから実行して振り返るということである。生徒の自己効力感が高くなかったということであるが、日本全体で低く、それを育むためには「社会の中で自分がこういう活躍ができるんだ」というところがないといけない。教科連携や総合的な探究の時間で社会との関わりを増やしていく必要がある。さらに教科連携や総合的な探究の時間を生かすためには、普段の教科の授業も変えていかないといけない。公開授業は1時間であるが、年間を通じて、テーマを決めて、複数の教科で連携を行なっていくことが必要なのではないか。指導案も全体計画の中の位置付けで書くべきである。本時の目標もエージェンシーに関したことで掲げ、それに対して表裏一体となるような評価規準を設けるべきである。今回の授業は数学、生物で2つに分かれてしまっていた印象があり、生物・数学を行き来しながら進めた方が良かったのではないか。

### 3. 課題

本公開授業は教科連携の試みであったが、1時間で独立したものとしてではなく、学校の中の全体計画をきちんと立てて実行していくことが必要である。対立・ジレンマについては参加者、助言講師から話題に挙がった。ジレンマが生じた場合、感情が入ることもあるだろうが、それを繰り返していくことで議論が深まると考えられる。

## 理科 (物理基礎) 「光の回折・干渉」

授業者 能代谷賢治

## 1. 研究主題との関わり ～ 生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか ～

本授業は、羅針盤モデルの「新たな価値を創造する力」とエージェンシー尺度の「成長マインドセット」への繋がりを意識した。生徒が新たな価値を創造するために学校教育に求められていることは、現状に疑問をもち、他者と協働しながら既存の枠組みにとらわれずに考える機会を与えることである。新たな価値を創造する力を構成する要素として、現状を客観的に捉えようとする批判的思考力や多様な他者との協働、新しい発想を試してみる敏捷性、新たな考えや発見に基づいて柔軟に自身のアプローチを変えていく適応力などが挙げられる<sup>1,2)</sup>。生成 AI の活用によって世の中が大きく変わりつつある状況で生徒の学習においても生成 AI が活用されつつあるが、回答の真偽を確かめるための事実確認(ファクトチェック)が必要である。本授業では生徒の思考を深化させるツールとして生成 AI を活用し、観察実験による事実確認を行った。これにより、日常生活における物理現象の概念理解や生成 AI・級友との対話で生じる批判的思考の促進を目指した。

## 2. 単元計画

学習内容	時数	備考
波の性質	2	2/2のみ教育実習生が担当
音の振動	12	7/12まで教育実習生が担当
波の回折・干渉	1	物理の学習内容
光の回折・干渉	3 (本授業 1/3)	物理の学習内容

## 3. 公開授業の概要 ～ 生徒エージェンシーの育成の観点から ～

本授業の題材は「光の回折・干渉」であり、スリットによる回折・干渉現象によって光の波動性を定性的に示した。本授業のねらいは、生徒が自身の観察結果と生成 AI の回答を比較しながらその回答の前提条件や適用範囲を分析すること、生徒が生成 AI や級友との対話によって既存の考えを深めようとするのであった。これは批判的思考の促進、多様な他者との協働を満足し、新たな価値を創造する力の育成につながると考えられる。以下では、本授業の指導過程の概要を示す。

導入では、平面波が単スリットや複スリットで回折・干渉した前時の観察結果を確認させた。その後、光ならばどうなるかを生徒に問いかけ、「光は粒子か?、波か?」を学習課題として提示した。このとき、光が自身の身体で遮られて影ができる生徒の日常生活経験を想起させ、ニュートンが提唱した光の粒子説を支持する説明を行った。

展開では、生徒がレーザー光を用いて光の回折・干渉現象を観察した。その際、生徒は以下の 3-1. から 3-4. に示す予想・予想の深化(例:可視化する,根拠を持たせる,数式で量的関係を示す)・観察・記録の4段階の流れを,単スリットと複スリットの条件でそれぞれ経た。例として,3-2.における生成 AI を用いたシミュレーションを図 1 の(a)および(b)に示す。また,3-3.における光の回折・干渉の観察結果を図 2 および図 3 に示す。その後,観察結果と生成 AI の回答を再度比較し,生成 AI が表現できていない点や自身が納得していない点について生成 AI や班員と対話しながら,光の回折・干渉現象の理解を深めた。例えば,図 1 から図 3 では単スリットによる光の干渉が生成 AI によるシミュレーションで表現できていない。

3-1. 光が粒子,あるいは波だとした場合,光をスリットに入射したとき,スリットの後ろに設置したスクリーンに映る光はどうなるかをそれぞれ予想し,ワークシートに記入する。

3-2. 生成 AI による回答や生成 AI を用いたシミュレーション結果によって,自身の予想を深める。

3-3. スリットによるレーザー光の回折・干渉現象を観察する。

3-4. 観察結果と生成 AI による回答を比較し,生成 AI の回答で表現できている点・表現できていない点を記録する。

まとめでは,生徒が授業で分かったことやまだ分からなかったことなどを振り返り,ワークシートに記入した。

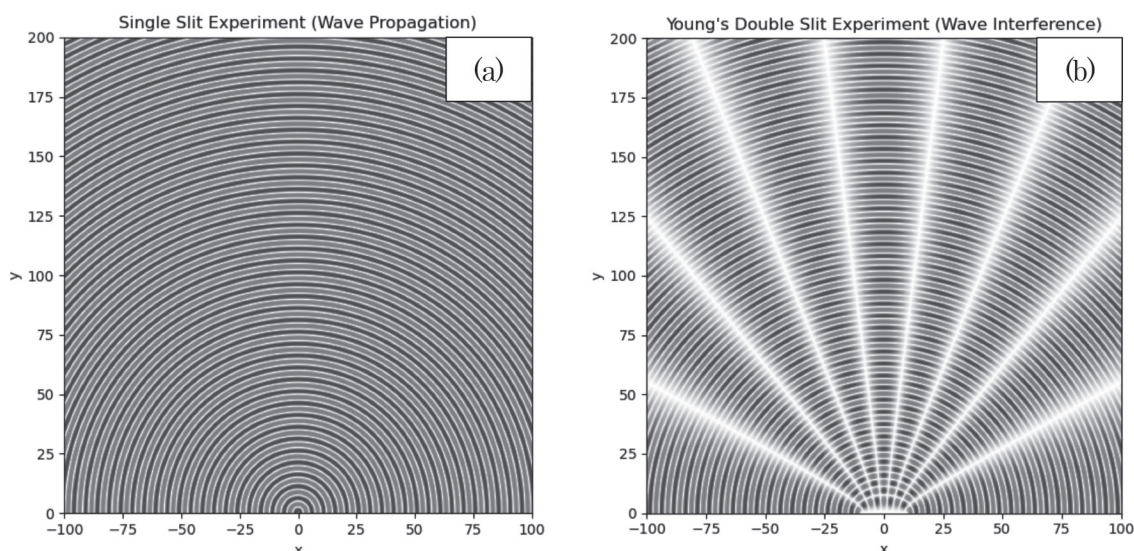


図1 生成 AI が作成したスリットによる光の回折・干渉シミュレーションの例  
(a)単スリットの場合, (b)二重スリットの場合



(左) 図2 幅 0.02 mm の単スリットに緑色レーザー光を照射させた際のスクリーンの観察結果

(右) 図3 幅 0.02 mm, 間隔 0.1 mm の二重スリットに緑色レーザー光を照射させたスクリーンの観察結果

#### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

本授業では、3-2.の予想の深化で生成 AI を活用させた。その際、生徒は文章や数式による解説から理解しようとしていたり、図による可視化を試みたり、プログラムを作成させてシミュレーションしたりしていた。生徒の予想を生成 AI の活用前後で比較すると、スクリーン上の光だけであった予想がスリットを通過した瞬間やスリットからスクリーンに到達するまでの時間変化を含んだ予想に深まっていくなどの変容が見られた。また、授業で使用したワークシートの振り返りには、「なぜ単スリットでも干渉するのか?」、「そもそも、なぜ光が強め合うと明るいのか?」、「なぜスリットの幅が狭い方に広がるのか?」などの記述があった。これらの記述から、生徒は生成 AI や級友との対話をもとに観察結果を客観的に捉え、自身の既存知識と照らし合わせて生じる素朴な疑問と向き合っていたことが読み取れる。

一方、本授業における机間指導で、生徒が生成 AI に対して疑問に感じたことをただ問うているだけの場面がしばしば見受けられた。また、本授業の参加者によるフィードバックには、「生成 AI とのやり取りによって、級友との対話が減少しているのではないか。」との指摘もあった。単元冒頭など、思考の前提となる基礎知識が乏しい学習段階においては、級友との知識の確認や円滑な議論が難しいことが分かった。ここで理想となる生徒の姿は、学習を進めていく中で生成 AI や級友に対して自身の考えを投げかけ、議論する姿だと考えられる。その場合、事前課題などによって基礎知識を補完したり、生成 AI の活用場面を精選・吟味したりする教員の工夫が必要である。

また、本授業ではプログラミングに関する専門的な知識を持たない生徒であっても、比較的容易にシミュレーションを作成することができた。しかし、コードの変数の値を変化させてシミュレーション結果を比較するなど、物理量の量的関係を探る学習活動は困難であった。有効な生成 AI 活用のために、プログラミング教育との連携に可能性があると考えられる。

#### 5. 引用文献

- 1) OECD : OECD Learning Compass 2030 - Concept Note : Transformative Competencies for 2030, OECD Publishing, 2019, p.63.
- 2) 白井俊 : OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 : エージェンシー、資質・能力とカリキュラム, ミネルヴァ書房, 2020, pp.151-154.

研究協議会

## 「生徒エージェンシーの育成を目指す理科授業の検討」

提案者 理科  
助言講師 小林 一人（国立教育政策研究所）

### 1. 本校からの提案

生徒エージェンシーの育成に向けた理科授業について、授業方略や教材研究の観点から議論を展開したい。特に「成長マインドセット」に焦点を当て、日常生活における物理現象の概念理解や、生成 AI との対話を通じた批判的思考（クリティカル・シンキング）の促進を目指す。

### 2. 協議会における議論

#### (1) 物理科における授業実践の背景

構成主義的な考え方にに基づき、探究的学習を育むため「反転学習を前提としたピア・インストラクション」や「ICT・生成 AI を活用した実験・実習」を導入している。特に観察・実験を「深い学び」へと昇華させるツールとして、生成 AI の有効活用を模索している。

#### (2) 公開授業に関する質疑応答と分析

光の回折・干渉」を題材に、生成 AI で実験予想を立てた上で実証実験を行い、批判的思考力、他者との協働、適応力の育成を試みた。ICT 活用の意義として、波の性質は可視化が難しいため、AI を活用したプログラミングによるシミュレーションを取り入れた。生徒は AI の回答の真偽を考察する過程（ファクトチェック）に関心を示した。一方で、AI への依存が進むと生徒同士の直接的な対話が減少する懸念がある。予備知識の差により理解に苦しむ生徒も見受けられた。実験時間の確保や導入の構成に工夫の余地がある。

#### (3) 教育活動全般における生成 AI 活用の可能性

意見の集約、仮説の構築、探究手法の模索において生成 AI は非常に有用である。プロンプトの精査や検索結果の検証を通じ、新たな発想を得るツールとして機能する。数学の模範解答作成や化学の構造式記述など、結果を「鵜呑みにせず考察する」姿勢の育成が共通課題である。教師側としても 指導案作成や、生徒への問いかけのヒントを得る場面での活用が期待される。また、実際に実験を行い、ファクトチェックを行うことで、実験が仮説通りに進まなかった際、それを「失敗」と片付けるのではなく「なぜ」と疑問を持たせる指導が、成長マインドセットの育成に直結する。

### 3. 今後の課題と展望

- ・導入時期とスキルの習得：発達段階に応じた適切な導入タイミングの検討と、活用スキルの段階的な向上が不可欠である。
- ・個別最適な学びの実現：生成 AI を「自分事」として課題解決に当たるためのパートナーと位置づけ、生徒個々の探究を深化させる。
- ・教育観の再構築：理科教員として「どのような生徒を育てたいか」という根幹の教育観を持ち、サイエンスへの知的好奇心を刺激し続ける。
- ・「光の粒子性と波動性」を直感的に捉えるような、生徒の瑞々しい感覚を大切にしながら、理工系人材の育成にも寄与していく。

公開研 公開授業 I・II

## 教保健体育科 (体育) 「チームで取り組むテニス学習」

授業者 松川 想

### 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～

本授業では、生徒エージェンシーのコンセプトを「他者との関わり合いの中で、『責任（感）』を持って意思決定や行動選択を行うこと」と読み取っている。その上で、OECDの羅針盤モデルのひとつである「責任ある行動をとる力」を中心に、授業デザインを行っている。具体的には、①教師が設定した単位時間計画ごとの学習内容に対し、各々が目標を決め、実行し、振り返るAARサイクルを授業の流れとし、学習成果を上げるための「責任」をもたせること、②チーム内でそれぞれが役割を担い、技術練習やゲームの運営などを通して役割ごとの「責任」を引き受け、チームに貢献しようとするものである。

エージェンシー尺度との親和性については、個々の技能に即した目標を立てその達成を促すこと（自己効力感）、チームでの活動を基本とすることやチーム対抗戦を行うこと（所属感）、AARサイクルを回す中で見通しを持ち、目標や目的を持って課題に取り組むこと（目的意識）が、本授業では育成可能性が高いと考えられる。

### 2. 単元計画

		1	2	3	4	5	6	7	
社会・情意		係の内容理解、実行（記録等）				役割ごとの責任ある職務遂行			
戦術的課題		前後左右の揺さ振り（スペースを使う、作る） フットワーク、コート中央へのリカバリー				前衛後衛の動き理解 味方や相手に合わせて動く			
1h	0-5	挨拶・点呼・移動	挨拶・点呼・流れ確認・移動						
	10	単元説明							
	15	役割について	W-Up						
	20	W-Up	【幅狭シングルス】 ベースラインまで下げる GSのみのゲーム	【幅狭シングルス】 ネット近くに動いたら ボレーで得点する	【チーム内ゲーム】 オールコートダブルス 2人で守る チーム内ランキング ゲーム時間2分	【チーム練習】 ドリル・目標決定（ねらいを決め、デザインする） GSフォア・バック ボレーフォア・バック			
	25	手投げ幅狭ショートコート シングルス							
	30	相手を動かす（スペースを 生み出す概念理解）	【技術練習】 GSフォア・バック アプローチショット	【技術練習】 ボレーフォア・バック GSフォア・バック					
	35	ワンバンキャッチボール			【技術練習】 ダブルス練習 ドリル条件・目標決定	休憩			
	40	ラケット直上							
	45	乗せる・落とす	休憩						
	50	転がしたボールを打つ 2～3バウンドさせて打つ				【チーム対抗戦】 到達・チャレンジ目標 時間制のゲーム			
休み	10								
2h	0-5	休憩	【チーム内ゲーム】 幅狭シングルス 到達・チャレンジ目標		休憩				
	10	技術練習			【チーム対抗戦導入】 オールコートダブルス 流れの確認				
	15	GSフォア・バック							
	20	3人組打ち・出し・回収							
	25	6球で交代							
	30		整備・道具確認						
	35		C-Down、役割に対する自己・相互評価		C-Down、役割決め	C-Down、役割に対する自己・相互評価			
	40								
	45		まとめ						
	50		移動・解散						

#### 単元の目標

- ・安定した用具操作とボールを持たないときの動き、ペアとの連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防ができるようにする（知識及び技能）
- ・ゲームを通して自己の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて取り組み方を工夫できるようにするとともに、自己の考えたことを他者に伝えたりまとめたりできるようにする（思考力、判断力、表現力等）
- ・主体的に学習に取り組むとともに、役割に応じてチームに貢献し、互いに助け合い教え合おうとすることができるようにする（学びに向かう力、人間性等）

### 3. 公開授業の概要 ～ 生徒エージェンシーの育成の観点から ～

今回単元計画を考えるにあたって、生徒エージェンシーのコンセプトを、他者との関わり合いの中で、「責任（感）」を持って意思決定や行動選択を行うことと位置付け、本授業では、体育において「責任」をどう生徒に持たせるかをテーマとして、授業をデザインすることとした。

体育における「責任」を扱った教授モデルで有名なのは、「責任学習」である。また、「スポーツ教育」や「協同学習」といった教授モデルも提案されてきた。これらのモデルに共通していると考えられるのは、生徒にリーダーや記録といった「役割」を担わせるところにある。また、Metzler（2000）は、「理論的基盤、意図している学習成果、教師に求められる内容面に関する専門的知識、発達段階に即した発展的な学習活動、期待されている教師行動と生徒行動、独自の課題構造、学習成果の評価並びにモデルが確実に実行されているかどうかを判断する方法といった一連の内容を含み込んだ広範で一貫性のある計画」のことを、「学習指導モデル」と提唱した。このように、体育授業においては、いくつかの教授モデルや指導方法が提唱されてきており、これらを目標や環境に応じて意図的・計画的に授業に落とし込むことが、効果的な授業を進める上で重要であろう。

本校において、テニスは2・3年生でも選択できるが、主に硬式ボールを使って行う。硬式ボールでは、打球のコントロールが難しくなる。そこで1年生では、球足が速くなりがちな硬式ボールではなく、軟式テニス用のボールを使用することとした。軟式ボールを使用することで技術的な難易度を下げることができ、ゲームにおけるスピード感が落ちるため、初心者が多いテニス授業においても、戦術的課題に焦点を当てた授業が行いやすくなる。また、上記を踏まえ本単元は、必ず1人一つの役割を担わせ、個人競技であるテニスを、チームで協力しながら個々の成果を上げていくためにどうすれば良いか、チームとして機能するために必要なことはどんなことか試行錯誤しながら取り組むようデザインしている。授業の最後には、技能に関する学習成果と課題の確認に加えて、役割やチームへの貢献という視点で振り返る自己・相互評価の時間を設定し、自己と他者の双方向での振り返りを促していく。

### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

生徒エージェンシーは、単元だけでなく1年間ないし3年間（以上）のカリキュラムを経て涵養されるような能力であることから、今回の授業が単元の3回目ということもあり、変容といったところまで見とることはできなかった。しかしながら、どうすればうまくショットが打てるか、時には教えあったり自分からアドバイスをもらいに行ったりしながら、試行錯誤して学習に取り組む姿を見ることができた。また、スポーツの技術を練習するためには、用具や施設を管理したり、手分けしてボール等を回収して球出し役に供給したりと、1人だけではできない作業が多いのが特徴である。チームとして機能し始めたグループは、効率よく練習を回し、お互いによく声を掛け合うなど、良い雰囲気の中で集中して練習やゲームに取り組めるようになってきていた様子であった。

今後の課題としては、エージェンシーに含まれる個々の側面に着目した能力・スキルをより具体的に学習内容として設定し、その学習到達度を見とっていくような形成的及び総括的評価の仕組みを組み込みたい。また、教師自らが授業内外でどのようにして「目標」に向かって試行錯誤していくか、どう振る舞っていくか、という教師エージェンシーを持つ必要性についても岡出教授から言及があった。

現在、学習指導要領の改訂に向けた議論が行われているが、「主態」のような測定しにくい資質能力が評価の対象から外されることが危惧されている。現行の学習指導要領にもエージェンシーの土台を作る要素は組み込まれているものの、保健体育科の教員にその重要性を語る者が少ないのが現状である。今後、体育という教科の持つ価値を再認識し、体育だからこそ育むことができる資質能力、「目標」をしっかりと見定め、教員もより一層努力すること、頑張ることの責任を負っていきたい。

### 5. 引用文献

グリフィンほか：高橋健夫・岡出美則（監訳）（1999）ボール運動の指導プログラム－楽しい戦術学習の進め方－。

大修館書店：東京。

テニスベア 【初心者必見】 ボレーの基本と打ち方のコツをプロコーチが伝授. [https://www.tennisbear.net/blog/1428#mcetoc\\_lgrps576uim](https://www.tennisbear.net/blog/1428#mcetoc_lgrps576uim), (最終参照日 2025 年 11 月 28 日)。

研究協議会

## 体育における生徒エージェンシーの育成と評価

提案者 保健体育科  
助言講師 日本体育大学教授 岡出 美則

### 1. 本校からの提案

学習指導要領には、「公正・協力・責任・参画・共生といった態度・価値観に関する指導内容が示されているが、「主体的に学習に取り組む態度」についての評価の難しさについて、現在の学習指導要領改正に向けた議論でも指摘されている。この評価の困難さが指摘される背景には、学習の対象が明確にされていないこと並びに評価方法に対する誤解が存在していると考えられる。このような状況下で「生徒エージェンシー」をどう育みどう評価するのかという問いは極めて困難を要するような課題にも感じられるところではあるが、岡出美則先生のお力をお借りしてカリキュラム・マネジメントの観点を踏まえ、保健体育科の担う生徒エージェンシーの育成や、教師に求められること（教師エージェンシー？）なども議論を深めていきたい。

### 2. 協議会における議論

協議会実施に先立ち、本日の授業実践に関する意見交換・質疑応答が行われたが、参加者にこれから教員を目指そうとする現役大学生が多数を占め、そちらからの授業に関する発問に対応することで終始してしまい、提案内容に関する議論は行うことができなかった。その中で上記内容に近い部分について抜粋することとする。

- ・自身の役割への責任を教師としてどのようにアプローチしていたのか？  
→必要以上のことはアドバイスせず、どのようにすればよくなるのかを問いかけた。
- ・「責任を果たす」は手段なのか目的なのか？  
→現状は「手段」だが今後は「目的」とさせていきたい。
- ・責任と役割を付与されて活動している生徒が、評価されるために行わされていることになっていないか。与えられた役割以外の役割を取りもつとしない生徒への指導は？  
→どう評価するかはまだ決まっていない。役割ごとに評価をしなければならないだろうが、あまりこだわっていない。

### 3. 課題

前述の通り、協議会での議論は行われなかったため、助言者である岡出美則先生の総括をここに記すこととする。

体育では学習動機に関わる部分をどう評価するのかであるが、結果として知識と関わる部分が含まれるので、役割と責任は個人内評価で、評定の対象にしないが、学習したかどうかを見なければならぬ。エージェンシーの定義とは、社会参画を通じて人々や環境に良いものになるように影響を与えるという責任感を持っているということ。責任感を評価しないとエージェンシーの定義から外れてしまう。エージェンシーの構成要素に堅硬な学びの基礎《リテラシー》でそこには身体的・心理的な基盤が含まれる。エージェンシーを育てる基盤として技能や体力は入っているので、そこを語らずにエージェンシーを語るのは不便である。フィジカルリテラシーにはソーシャル・サイコロジカルが含まれる。この内容は現行の学習指導要領に分散して入っているので、現行の体育の実践はエージェンシーのベースを作るという言い方をしても外れていないが、それを語る人たちがいないので、エージェンシーを高めることは問題解決能力や責任感、ということが表に出ていることにはリスクがあると考え。先が見えない世の中で自分はどこへ行きたいのかというゴールを定めながら教えていかなければならないし、そのことに関して責任を持って行動できる人間を育てていかなければならない。それを体育の授業に当てはめると、目標に向けて生徒を責任もって育てていかなければならない。教師主導か生徒主導かの議論だが、部活動だと教師主導だとドロップアウトする人がたくさん出る。レギュラー以外の人は練習に関与することに責任を持たなくなるからである。選手に考えさせるシステム（責任システム）が必要だが、批判されることもある。自立支援も行い、管理も行い、双方がバランスを考えながら行わなければならない。改めて単元計画を常に試行錯誤していく必要があり、それは教員のエージェンシーを高めることにもなるのではないか。

## 芸術科（音楽Ⅰ）「知らない音楽」

授業者 居城 勝彦

### 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～

「自分が好きな音楽」を持つことは、誰にとっても自然な営みである。同時に、私たちは「自分の知らない音楽」が世界中に存在していることを日常的に意識する機会が少ない。特に現代の音楽環境では、ストリーミングサービスやSNSなどのアルゴリズムによって、個人の嗜好に基づいた音楽が自動的に推薦される。この「パーソナライズ化された音楽体験」は利便性をもたらす一方で、音楽的出会いの幅を狭め、異文化理解や多様な感性の涵養を阻む可能性がある。本授業では、この現状に気づかせ、「知らない音楽」と出会う意義を主体的に考えることを目指す。

本授業は、生徒が自らの音楽的嗜好の偏りを自覚し、他者との関わりを通じて多様な音楽文化に開かれる姿勢を育てることをねらいとする。デジタル時代において「知らない音楽」に出会うことは、単なる情報探索ではなく、自己理解と他者理解を深める創造的な学びの契機である。音楽を媒介としたこの探究的な対話が、生徒一人ひとりの音楽観を広げ、文化的共生社会を生きる力を養い、生徒エージェンシーへとつながることを期待している。

### 2. 単元計画（3時間扱い）

第1次 自分の「好きな音楽」を紹介しよう（1時間）

第2次 「好きな音楽」「知らない音楽」が生まれる仕組みを知ろう（1時間／公開授業1時間目）

みんなで「太平洋地域の音楽」について知ろう（1時間／公開授業2時間目）

### 3. 公開授業の概要 ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

#### ①本時のねらい

- 自分を取り囲む「パーソナライズ化された音楽体験」に気づき、その仕組みを理解する。
- 自分にとって未知の音楽文化（知らない音楽）を仲間とともに知っていく過程を体験する。

#### ②本時の授業展開

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
1時間目 (10) (20)	○私の好きな音楽を紹介しよう。 <b>お互いの発表から考えたことを挙げてみよう。</b> ・知っている／知らない曲や音楽があった。 ○新しい音楽と出会う方法を考えてみよう ・同じアーティストを聴き続ける ・友達に勧められて ・流れてくる曲をとにかく聴く <b>エコーチェンバーについて知ろう。</b> ・知らないうちに仕組みにハマっていた ・メリットとデメリットを知って使えば、悪いことでもない。	・前時紹介しきれなかった4人が発表し、生徒の意識を前時の活動と繋げた。 ・前時で曲やアーティストが被ることはなかったクラスである。その多様性に気づかせ、自分の紹介した音楽に興味を持った人がいるという自己有用感にも気づかせたい。聴き方の違いを否定的に捉えるのではなく、多様な方法があると肯定的に捉えさせた。つぶやきの中にある素朴な感想や疑問を生徒と共有するように心がけた。
(10)	<b>「太平洋地域の音楽」をみんなで知ろう。</b> ○「太平洋」と聴いて思い浮かぶ地域はどこだろう ・ハワイ・ニュージーランド・オーストラリア	・エコーチェンバーは現象であり、仕組みを知り、特性を理解して使用することが大事であることを伝える。気づかぬうちに嗜好がコントロールされる現代社会の一側面を意識できるようになることが重要である。そのためにも自分事から始まる思考を大切にしたい。

<p>2時間目 (10) (20) (15)</p>	<p>○「太平洋地域の音楽」と聴いて思い浮かぶ音楽は？ ・踊り・太鼓・ハワイアン（フラ）・ハカ</p> <p>○ハワイの「真珠貝の歌」を歌ってみよう ・ハワイ語は初めて ・なぜ少しメロディが違うハワイ語と英語の曲があるんだろう。</p> <p>○太平洋地域の音楽について調べよう</p> <p>○調べたことを共有しよう ・初めて知ったことや見たものが多かった。 ・初めてハワイ語で歌った。</p> <p>○今日の授業を振り返ろう ・あなたにとって効果的だと思う「知らない音楽」と出会う方法は何か。 ・今日の学習感想をフォームで回答する</p>	<p>・太平洋は知っているようで知らないことの多い地域である。そこに気づかせ、地域や音楽について知る動機づけとした。仲間とともに歌唱表現に浸る時間を大切にする。表現と思考は学習活動の両輪である。教師のウクレレ弾き歌いに合わせ、ハワイ語の歌唱から始め、身体に音楽が馴染むまで繰り返した。その後、英語で歌唱した。演奏の感触から、旋律の違いや歌詞の意味、成立背景に意識を向けさせようとしたが、ウクレレの演奏に関心が向く生徒が多かった。</p> <p>・調べて終わりではなく、自分や仲間の調べた情報を重ね合わせる中で、何がわかるか/わからないかを大事にした。ネットで得られる情報だけでなく、書籍・雑誌・新聞記事なども提示し、活用できるようにした。(学校図書館との連携)</p> <p>・調べる中で自然に起こる生徒間の対話を大切にしたい。特に自分の経験を語り出した時は、無理のない範囲で共有をし、共感的理解の場とした。正解を求めることも大事だが、互いに意見を出し合い考えていく過程を味わうことを大切にしたい。</p>
--	---	---

#### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

授業後のフォームの回答からは、現代特有の「フィルターバブル（情報の偏り）」を自覚し、受動的な鑑賞態度から脱け出し、主体的に音楽文化と関わろうとする生徒エージェンシーの萌芽が読み取れた。生徒たちは、アルゴリズムによって最適化された狭い音楽の世界を乗り越えるため、「人」「テクノロジー」「環境」の三つの側面から自らの行動を変容させようとしている。

第一に、他者との協働を通じたエージェンシーの発揮である。多くの生徒が「趣味が異なる他者」との対話を、未知の世界への最短ルートと捉えている。ネット検索の無機質な情報よりも、友人の思いのこもった語りや共有体験を重視する姿勢は、他者との差異を尊重し、相互の関わり合いの中で自らの価値観を広げていこうとする共同主体性の表れである。単なる情報交換にとどまらず、他者を「新しい世界への扉」として、対話を通じて自己の殻を破ろうとする意志が見られた。

第二に、テクノロジーに対する主体的な制御である。生徒たちはAIやアルゴリズムの特性を理解した上で、「今の好みと真逆の曲を提案させる」「意図的な検索で傾向を外す」など、システムを逆手に取る工夫を見出した。一部の生徒からはAIへの依存がもたらす閉鎖性を危惧する声も上がり、デジタル環境に流されるのではなく、自らの学習目的のためにツールを批判的に使いこなすようなメディアリテラシーと主体性の発揮が読み取れる。

第三に、体験を通じた文脈へのアクセスである。旅行や公共施設の活用など、身体的な移動を伴う出会いの価値を再評価する意見が挙がった。音楽を単なる消費コンテンツとしてではなく、その背景にある歴史や文化（コンテキスト）とセットで体験しようとする態度は、学びを自らの人生や社会と結びつける深い探究心に基づいている。

以上のことから、本実践を通じて生徒たちは、情報の「受け手」から、自らの意志で文化的視野を拡張する「自律した学習者」へと変容しつつある。未知の音楽との出会いを自らデザインし、多様な文化に対して開かれた態度を形成しようとする彼らの姿は、予測困難な社会を生き抜くために必要なエージェンシーそのものであると評価できる。

#### 5. 参考文献

- 「図解でわかる 14 歳から考える AI の未来と私たち」インフォビジュアル研究所著、太田出版、2024 年。  
「教育音楽 秋号 2025.10」音楽之友社、2025 年。

研究協議会

## 「音楽で地球市民を育てる」

提案者 居城 勝彦

助言講師 小山 英恵

### 1. 本校からの提案

世界が密接につながる現代において、異なる文化を持つ人々と互いに尊重し合い、共に生きる力（地球市民性）を育てることは教育の重要な課題である。音楽は、言葉や国境を越えて人々の心をつなぐことができるため、この力を養うのに非常に適している。

本授業では、生徒が自らの好みの音楽にある偏りに気づき、未知の音楽文化に対して心を開いていくことを目指した。授業の導入では、普段利用している音楽配信サービスの「おすすめ機能」などが、知らず知らずのうちに自分の聞く音楽を限定していることに注目させた。これにより、生徒は自分の価値観を客観的に見つめ直し、「知らない音楽」を知ることの意義を深く考えるに至った。

その上で、太平洋地域の音楽を題材に取り上げた。単に音を楽しむだけでなく、その背景にある歴史や人々の移動、文化の混ざり合いについて気づききっかけとした。地理や歴史など、他の教科で学んだ知識も結びつけながら学ぶことで、音楽を社会的な営みとして捉える視点を養った。

音楽を学ぶことは、世界中の多様な声に耳を傾け、その背景にある歴史や想いを理解しようとする姿勢を育てることである。未知の音楽との出会いを通じて、他者を尊重し、自ら進んで世界と関わろうとする主体性(エージェンシー)を持った生徒を育てていきたいと考える。

### 2. 協議会における議論

本実践は参会者から、生徒の日常生活と教科の学びを有機的に結びつけ、主体的な学習態度を引き出した実践として評価された。主な評価点は以下の4点に集約される。

第一に、SNSのアルゴリズム等を導入に用い、学習を「自分事」化させることで未知の音楽へ自然に接続させた点。第二に、歌唱・器楽・探究・共有をバランスよく配置し、静と動のメリハリによって生徒の意欲を持続させた点。第三に、ICTを日常的に活用しつつ、他者の意見を尊重する協働的な環境が構築されていた点。第四に、年度当初の生徒アンケートと比較することで、異文化に対する認識の変容を生徒自身に自覚させた手法が有効であった点である。

音楽の学習では、世界の音楽として様々な地域を取り上げることが可能である。今回、太平洋を地域として選んだのは、生徒にとって身近にありながら、実はよく知らないという現実教材性があると判断したからである。また、この地域の音楽文化の形成には欧米諸国の影響が大きく、それは現在も続いており、グローバルヒストリーにおけるポストコロニアルな視点を知るのに適している。本実践では太平洋地域の豊かな音楽文化に触れること、そこに欧米諸国の影響が感じられることは達成できているが、成立背景やより詳細な音楽的特徴の比較までは及んでいない。本時で体験した「ウクレレ弾き歌い」の活動を今後さらに発展させ、表現者としてハワイの音楽に取り組むことで、太平洋地域の音楽文化についてより深く考える学習活動へと進めていきたい。

助言講師の小山先生からは、演奏や思考を通して能動的に音楽に関わろうとする姿には、十分にエージェンシーが発揮されているとの指摘があった。また、自分の好きな音楽に向き合うところから、自分の音楽の世界をどう広げていくかという音楽との関わりをメタ認知していくことが大事であり、演奏や思考を通して学習集団の中で音楽的変容が生まれ、その集団の新たな音楽文化ができていくことに価値があることにも触れられた。

### 3. 課題

生徒がエージェンシーを獲得する過程では、自己の（あるいは自己が所属する集団の）変容に気づくことが必要である。題材設定はもちろんだが、それを生徒がどう日常化していくのかを見越した活動の設定、すなわちカリキュラムマネジメントが重要であろう。

公開研 公開授業 I・II

## 芸術科（工芸 I）「○○な場面で使用する食器を提案しよう」

授業者 神田 春菜

### 1. 研究主題との関わり ～ 生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか ～

本題材は、数十年後の未来の食卓を想像し、使用者の生活や心情を考えた食器を制作することをねらいとする授業であり、「A 表現(2)社会と工芸」の内容を取り扱ったものである。本校生徒はものづくりに意欲的だが、社会的視点で構想が曖昧になりやすい課題がある。そこで、使用者の立場や使用場面を意識しながら、試作・制作・評価を繰り返す活動を通して、生徒自身が主体的に考え、創意工夫する経験を重視する。この過程により、生活や社会の価値を考え新しいアイデアを生み出す「新たな価値を創造する力」が育まれるとともに、作品の安全性や使いやすさを意識することで、自らの制作に責任を持ち、相手を思いやる姿勢が養われ、「責任ある行動をとる力」につながっていくと考える。さらに、「AAR サイクル」を意識した改善の繰り返しにより、自律的に学び行動する力を高め、生徒エージェンシーの育成に資する指導を実現する。

### 2. 題材計画

授業は全 20 回として、表現と鑑賞の活動を組み合わせて展開した。

次	学習内容	評価の観点（評価物）
第一次 2時間	①日々の食事の場面を振り返りながら、食卓の機能や役割について考える ②未来の食卓の理想の姿について検討する	知識、発想や構想の能力、主体的に学習に取り組む態度（表） （ワークシートの記述、ポートフォリオ、授業の取り組みの様子）
第二次 8時間	①未来の食卓を実現するための食器の条件を検討し、構想するとともに、試作品を制作する ②試作品を互いに評価したり既存の製品と比較したりし、安全性や機能性の改善を図る ③三面図の作成と制作計画書の作成	知識、技能、発想や構想の能力、主体的に学習に取り組む態度 （ワークシートの記述、試作品、評価シート、三面図、ポートフォリオ、授業の取り組みの様子）
第三次 8時間	①計画に基づき制作する（成形→乾燥→素焼き→施釉→本焼き）	知識、技能、主体的に学習に取り組む態度 （作品（途中経過含む）、ポートフォリオ、授業の取り組みの様子）
第四時 2時間	①実際の使用場面を再現した鑑賞会を行い、作品の批評を行う	知識、鑑賞の能力、主体的に学習に取り組む態度 （鑑賞シート、ポートフォリオ、授業の取り組みの様子）

### 3. 公開授業の概要 ～ 生徒エージェンシーの育成の観点から ～

本題材は「A 表現(2)社会と工芸」の内容を扱い、数十年後の未来の食卓を想像し、その食卓にふさわしい食器を考え、制作することを目指す。使用者の食生活がより心豊かになること、そして安全で機能的に使える造形を追求することを重視する。

「A 表現(2)社会と工芸」では、使用者や使用場面を想定した発想・構想が重要であり、使いやすさ・安全性を実現するには一定の技術も求められる。使い手を意識して制作を行うことで、自分の作品に対する責任感を育てることをひとつのねらいとしている。そのため、本制作前に試作を行うことで、技法を身に付ける機会を設けるとともに、試作品を客観的に評価する活動を通して、ねらいに沿った作品構想ができているか確認する時間を確保した。

### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

公開授業では、中間評価シートを通して、作品の自己評価を行うと共に、6人グループに分かれそれぞれの作品に対してアドバイスをする活動を行った。自己評価では、コンセプトの再確認をすると共に、コンセプトを満たすために

どのような造形の工夫を行ったのかを、ワークシートにまとめた。造形の工夫については、試作段階であるため、形に関連する部分を中心に振り返りの項目を設けた。項目は形に関わるものとして「形状」「大きさ」「厚み」「高さ」「反り」「その他」とした。特に重さや厚みなどはアイデアを出している段階では、実感できない部分がある。試作段階で意識が向き始めるこの段階で自己評価を行うことにより、使い勝手の視点から工夫や改善点を考えるきっかけとした。

評価シートに書かれた内容を見てみると、「大きさ」の項目に対してはほとんどの生徒が具体的な工夫を書いていた。「厚み」や「重さ」、「高さ」に関しては想定した使用場面に応じて重さを置く部分が異なっていたが、食卓の場面に具体的にイメージできている生徒は多角的に考えていることができていた(図1)。一方で、曖昧なイメージで進めていた生徒は空欄も目立っていた。しかし、評価活動後のデザイン改善の段階では、足りていない部分を意識し、具体的な数値を考えたり、検討していなかった部分の工夫を描き足したりと、足りていない部分に配慮して工夫改善を図っている様子が見られた。



図1 左：評価シートの自己評価欄，中央：試作品，右：コンセプトシートに改善点を赤字で追記したもの

グループでの活動では、全体的に積極的に自身のアイデアを紹介し、それに対して疑問点や改善点を指摘する様子が見られた(図2)。そこでの指摘に反論を示しつつも、自分とは異なる見方を受け止め、必要に応じて改善案に取り入れていた。今後の授業で実際に作成し、完成したものを鑑賞する中で再度相互評価を行う予定であるが、そこでの振り返りを通して、生徒が中間評価や制作を通してどのように変容したかを見取る予定である。

今後の課題として現状では目的に沿ったものへと改善していく視点は教員から示される形となっているが、理想としては生徒自身からその視点が生まれることで主体的に改善する姿勢に変化すると思われる。そのための工夫が現段階では不十分である。改善していくためには教員や生徒同士だけでなく、第三者の声が必要であろう。授業の展開の仕方について引き続き検討していきたい。



図2 グループ活動の様子

研究協議会

## 「生徒エージェンシー育成を目指し、 どのように美術、工芸の題材を設定するか」

提案者 芸術科（美術，工芸） 神田 春菜  
助言講師 古瀬 政弘（東京学芸大学）

### 1. 本校からの提案

高等学校芸術科の工芸の領域の1つである「A 表現(2)社会と工芸」は、社会的な視点から工芸を捉え、エージェンシー育成と深く関わる内容である。しかし、第三者の視点から捉えて制作をすることや、そこから社会にとっての価値を実感することは、言葉で言うほど容易ではない。ものづくりを通じた学びにおけるエージェンシー育成の重要な要素は「まだ見ぬ他者（社会）に対する責任感の発揮」にあると考える。身近な人への責任感発揮しやすいが、その感覚を見たこともない、出会ったこともない人たちに対して発揮させることができるか。この普遍的な他者への想像力こそが、創造的な活動を通じて社会に参画する態度を育む鍵となる。そのためには、どのような題材を設定し、どのように評価していくかを検討した。

### 2. 協議会における議論

生徒エージェンシーの観点から工芸の学びについてどのような工夫ができるかについて議論が展開された。以下、協議会で出てきた話題をいくつか紹介する。

- ・工芸などのものづくりは、身体的な学び、野生的な学びと呼べるものであり、作ることそのものが楽しいものである。制作する間は無我夢中で取り組むことが多く、後々振り返った時に気付くことも多い。一方で「社会と工芸」は目的に沿って考え、計画的に制作することに重点を置いている。工芸の本質的なところと目的にズレが生じやすい為、両立させるのが難しい部分がある。
- ・生徒エージェンシーとものづくりの関係を考える際に、リチャード・セネット著の『クラフツマン：作ることは考えることである』（2016、筑摩書房、高橋勇夫訳）が参考になる。品質の高い製品を作る技であるクラフトマンシップについて論じている。クラフトマンシップの能力として、問題のある場所付きとめる力、作っているものに対し疑問を抱く力、そしてそれらを打開し広げていく力などが挙げられている。
- ・新潟県の燕三条にある鋳起銅器の工房があるが、そこで銘（刻印）について話を伺ったことがある。そこでは、制作した商品に三つの銘を打っている。1つ目は商品のシリーズを表すための刻印、2つ目は製造年を表すための干支の刻印、3つ目は制作者を表すための職人の刻印である。銘を刻むことで、職人の中に商品に対する責任と職人としての誇りが生まれることを期待してそのような形にしているようである。授業で制作する作品にも、刻印することを取り入れることで使い手を意識させることに繋がるかもしれない。また、チームで組んでアイデア出しや構想は協力して取り組み、制作では構想をもとに、皆で同じものを作るそこにそれぞれの銘を打つような形で授業を展開しても面白いかもしれない。
- ・制作したものは、必ずしも制作者の意図通りに使用されるとは限らない。例えば、千利休は元々は異なる目的で使用していた道具を、花器として用いている。最後の鑑賞で、中学生などに鑑賞してもらい、どのような用途で使うのかを想像してもらう。その中で、生徒が想定した目的とズレが生じた時、他者の価値や社会というものを意識するのかもしれない。

### 3. 課題

「A 表現(2)社会と工芸」の題材となると、目的に沿ったものを構想することができたかに着目することが多い。しかし、作り手の使い手の感じ方のずれからを通して、改めて他者や社会を捉え直すということは、一つ大事な活動であると感じた。制作を終えたところで、どのような視点で自分自身の活動を振り返るのかということ意識し、適切な発問から相互鑑賞の時間を設定することが、今後は必要であろう。

また、自分自身が制作したものが、第三者にどのような影響を与えるか、実感を持てる場面があまり設定できていなかった。例えば、附属中学校で工芸作品の鑑賞として、本校生徒が作った作品を鑑賞する機会を設けることで、作り手と使い手の目的のずれを感じる機会とすることができるかもしれない。連携して取り組める機会を設けたい。

最後に、評価についてはあまり協議を深めることができなかった。引き続き検討する必要がある。

公開研 公開授業 I・II

## 芸術科（書道 I）「散らし書きを通じて」

授業者 松原 直也

### 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～

本実践においては仮名の書の創作を通じて、特に羅針盤モデルにおける「新たな価値を創造する力」や「AAR サイクル」との関連性を意識しながら実践した。

散らし書きは、定型をもたないものである。一連の学習過程を通じて、今日残る古典における散らし書きの表現や、それに基づく他者の様々な表現や考えに触れ、得られた情報を取捨選択しながら整理し、自己の表現を追求することとなる。その中において、単に紙面における文字や文字群の配置を捉えるに留まることなく、より多角的な視点から散らし書きについて捉え、他の要素との関わりや、周囲との関わりを意識しながら学習に取り組む中で、新たな価値を創造することに繋がると考える。

また、本単元に限ったことではないが、創作の一連の学習過程を通じて、観点を確認することや他者との相互鑑賞・意見交換等の学習活動で得た視点を活用し試行錯誤しながら取り組む中で、生徒は AAR サイクルを実践していくこととなる。

### 2. 単元計画

#### 単元③（＊9時間構成）

##### ◆第1次（＊4時間）

鑑賞①（作成例）→言葉の選定→観点の確認①（単体）→構想・工夫①（草稿）→相互鑑賞・意見交換①→観点の確認②（連綿、変体仮名）→構想・工夫の見直し①→学習のまとめ

- ・作品の制作に用いる俳句を選定し、その俳句について調べる。
- ・これまで学習してきたことを活かし、構想・工夫し、作品制作を行う。

##### ◆第2次（＊4時間）

構想・工夫②→作品制作①（作品①）→自己評価①→相互鑑賞・意見交換②→観点の確認③（線質、字形）→構想・工夫の見直し②→構想・工夫③→作品制作②（作品②）→観点の確認④（構成）→構想・工夫④→作品制作③（作品③）→自己評価②→相互鑑賞・意見交換③→構想・工夫の見直し③→構想・工夫⑤→作品制作④（作品④・清書）

- ・構想・工夫したことをもとに、作品制作を行う。
- ・線質、字形、構成のそれぞれの要素から作品について構想・工夫し、相互鑑賞・意見交換等を行いながら作品制作を行う。

##### ◆第3次（＊1時間）

自己評価③→相互鑑賞・意見交換④→単元の学習のまとめ

- ・前時までに制作した作品について、相互鑑賞・意見交換を行う。
- ・単元の学習のまとめを行い、これまでの学習を振り返る。

### 3. 公開授業の概要 ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

高等学校芸術科書道 I の科目の目標においては、「(2)書よさや美しさを感じ、意図に基づいて構想し表現を工夫したり、作品や書の伝統と文化の意味や価値を考え、書的美を味わい捉えたりすることができるようにする」<sup>1</sup>とある。また、特に「意図に基づいて構想し表現を工夫し」については、「生徒が自ら心に響く言葉を選定したり、内の欲求や外的刺激による感動によっておこる思いや感興に基づいて、作品を構想し表現を工夫したりして、試行錯誤

しながら作品を完成させることである。その過程で、知識や技能を活用しながら、書を構成する要素や表現性、表現効果や風趣の視点を持って、実感的に表現活動を展開できるようにすることが大切である<sup>2)</sup>とされている。決して一筋縄ではいかないが、様々に試行錯誤して苦労しながら作品を完成させる、その過程の中で学習を通して身に付けた知識や技能を活用して表現することは、一連の学習において重要であると考えられる。

散らし書きは、村上 (2001)<sup>3)</sup>が「かなが進化していく段階で生み出されました。デザイン的に、あいまいで自由な感覚をもってくるのが、日本の表現の特色といえそうです」や、笠嶋 (2013)<sup>4)</sup>が「『散らし書き』とは、不規則、不安定な紙面構成をとった書式全般にわたって使われる『書』の専門用語である」と述べていることから分かるように、定型のないものであるため、書道Ⅰの学習の中で、仮名の書の創作を行うことは、生徒にとっても困難な場面が多くあるであろうと考えられる。しかし、仮名の書の学習が臨書までに留まってしまっただけでは、実感的に表現活動を通して仮名の書や、特に散らし書きについて学習することに繋がらないのではないかと考える。特に、本時においては全体の構成に視点を当て、仮名の書の学習を通して生徒が身に付けた、知識や技能を活用しながら、多角的な視点から仮名の書について捉え、試行錯誤し学習を行い、作品の制作を行なった。全体の構成についての観点の確認の中で、既に学習を行なった「三色紙」に加え、より多角的な視点から散らし書きについて理解を深めることができるよう、「檜原図屏風」や「舟橋蒔絵硯箱」の鑑賞を行なった。また、散らし書きが発達した平安時代の人々が散らし書きや、書の表現についてどのように捉えていたのか、代表的な古典文学である『源氏物語』中における記述に触れ確認した。それらを踏まえ、構想・工夫し作品制作を行なった。そして、ICTを活用しながら相互鑑賞・意見交換を行い、そこから自身の構想・工夫を見直し、作品を完成させた。

#### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

今回の公開授業に関わる単元を通して、生徒の散らし書きに関わる理解がより深まったのではないかと考える。散らし書きについては、一連の単元の学習を始める前には、行の高低や行間の広狭の変化等誌面における単純な配置についてまでの理解に留まっていた。しかし、作品制作をする過程において文字文化に関わる多角的な視点から観点を確認し、それらを積極的に活用することによって、散らし書きというものが単に文字の配置に留まるものではなく、様々な要素が複合的に関連し合いながら美を形作るものであるということが理解できたのではないかと考える。

特に生徒エージェンシーの点においては、散らし書きという我が国特有の書の表現について考え、作品を創造する過程において、新たな価値を創造することへと繋がったのではないだろうか。ここで、学習したことは漢字仮名交じりの書における全体の構成にも活かす汎用的なものともなるであろう。

今後の課題としては、生徒の作品から仮名の書ならではの表現の要素について、しっかりと触れていかなければならない点が挙げられる。散らし書きはもちろんのことであるが、単体、連綿、変体仮名等学習した様々な要素を取り入れながら作品制作を行った。しかし、結果として漢字仮名交じりの書のような作品になってしまったものもあり、これまで学習したはずの代表的な古筆に見られる表現からは程遠い作品も散見された。これは、この単元のみならず仮名の基礎・基本を取り扱う以前の単元における指導の課題であると考えられる。内容のまとまりにおける単元構成や、それぞれの単元においてどのように仮名の書の表現について触れるか、今後検討していく必要がある。

今回の公開授業を通して得られた成果や課題を踏まえながら、今後生徒が仮名の書の学習や、散らし書きについて学習を進める中で、少しでも日本特有の文字文化に触れ、その一連の過程の中で生徒エージェンシーの育成を目指した実践や取り組みを行っていききたい。

#### 5. 引用文献

- 1 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 芸術 (音楽 美術 工芸 書道) 編 音楽編 美術編』, p.265
- 2 前掲書 1.p.268
- 3 村上翠亭 (2001) 『今さら他人に聞けない かなの疑問 100』 株式会社芸術新聞社, p.85
- 4 笠嶋忠幸 (2013) 『日本美術における「書」の造形史』 笠間書院, p.145

研究協議会

## 「生徒エージェンシーの育成と仮名の書の学習」

提案者 松原 直也

助言講師 加藤 泰弘

### 1. 本校からの提案

今回の公開教育研究会では、「生徒エージェンシー」ということを特にキーワードとし、仮名の書の学習と関連させながら発表を行った。

散らし書きというある意味において、明確に定まった形の無いものに対して、生徒がこれまでに学習したことを積極的に活用しながら、自ら考え取り組んでいくことは、生徒エージェンシーを育む上においても大切なことの一つではないかと考えた。

今回、授業の中で ICT、特にスプレッドシートを活用した。比較的少人数ではあるが、共に学ぶ他者の考えや意見に触れながら刺激を受け、より一層自身の考えを深めながら学んで欲しいという願いがあり、また生徒の中からも「他者の意見に触れながら学習を進めたい」という声があったため、今回の形態となった。1人でワークシートに記入していたのではなかなか言語化が難しい生徒も、少しは抵抗感を感じることなく取り組めたのではないかと考える。一方、直接対話したり意見を交わしたりする中で気付いたり伝えたりできることもあると考えるため、両方のバランスを考えながら授業を組み立てていくことが必要である。

### 2. 協議会における議論

- ・ ICT を活用することによって、学習の一連の流れが一目で分かり評価をする際に行いやすい。また、他の生徒の意見や工夫を生徒同士が互いに見ることができるため、学習を進める際に参考にしやすい。
- ・ 他者の意見を参考にしやすく、自身の言葉ですぐに言語化できない生徒にとっても、最初の第一歩が踏み出しやすいものとなっていた。
- ・ 相互鑑賞も数人の限られた人数のグループで終わらせるのではなく、自分以外の全員の作品を実際に目で観て鑑賞する時間を設けたのが良かった。
- ・ 休憩時間も含めて、粘り強くそして主体的に作品制作や練習に取り組んでいる生徒がいた。
- ・ 学習の過程として、「自己評価→他者の意見」、「相互鑑賞・意見交換→作品創作」の流れがスムーズに進行していた。
- ・ 例えば、言葉のまとまりや運動性ということも生徒が意識できるような工夫が必要である。
- ・ 今回は仮名の書の学習、仮名の書の創作であるので、仮名に調和する漢字等を意識させる必要があるのではないかと考えた。（仮名の書というよりも、漢字仮名交じりの書の作品に近いようなものも確認された。）

生徒エージェンシーについては、答えのない作品制作に対して試行錯誤しながら、様々な観点を取り入れて学習を進め制作していく中において、育むことができるのではないかと考える。評価については、作品についてはもちろんであるが、構想・工夫していく過程の記述等を踏まえながら評価へと繋げていく必要がある。

### 3. 課題

今回は仮名の書に関わり発表を行った。生徒が自ら学び身に付けた知識や技能を活用しながら、自らの意図に基づいて構想・工夫する過程等を通して、試行錯誤しながら粘り強く学習に取り組むことができた。一方、仮名の書という視点で捉えた際に、仮名の書ならではの表現はどのようなものであるのか、漢字仮名交じりの書との違いはどのようなところにあるのか等といったことについて、改めて考える必要があると感じた。これは、該当単元のみならず、内容のまとまりはもちろんのこと、年間の指導計画全体を通じて仮名の書ならではの表現や、日本の文字文化について広く考えていくような取り組みが必要であるだろう。

研究協議会を通して、参観の方々から様々な視点からご意見をいただいた。現代において、なぜ散らし書きを学習するのか。その問いを常に念頭に置きながら、広く仮名の書の学習について今後も考えていきたい。

## 家庭科 「老いること・歳を重ねること」

授業者 野澤 風沙

## 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～

家庭科の授業では、「答えのない問い」について考えることが多い。その中でも、特に家族や保育、高齢者などの分野は、明確な答えを持たず、自分がその課題に対し何を考え、どう感じるか、そしてどう行動していくか、という思考のプロセスを重視する。この思考のプロセスを育むことは、本研究会の主題である生徒エージェンシーを育成するために求められる要素のひとつである（AARサイクルを回す力）と考えられ、自分の価値観や他人の価値観を受け入れ、お互いを認め合うこと（責任ある行動をとる力）にもつながると言える。

令和6年10月1日現在、日本の高齢化率は29.3%にのぼり、2070年にはその割合は38.7%になることが見込まれている（内閣府2025）。現在の高校生が将来参画していく社会は、少子高齢化に伴う問題が散見される可能性が示唆されているのである。そのような社会を生き抜くためには、まずは少子高齢化の現状について、高校生の段階で正しく理解することが必要である。家庭科以外の教科では、少子高齢化について高齢化率を数値として扱うことはあるが、高齢者の心身の特徴や介護保険制度、基本的な介助方法等について学ぶ機会は乏しいと言えるだろう（文部科学省2019）。また、次期の学習指導要領策定に向けた教育課程部会（中央教育審議会2025）では、中学校・高等学校家庭科における内容等の扱いにおいて少子高齢化に関しても触れており、学校教育の中で少子高齢化について扱うことが喫緊の課題となっている。

そこで家庭科では、高齢者及び高齢社会について、心身の特徴や高齢化の現実など、どうしてもネガティブになりがちな内容に限らず、アクティブシニアや、地域で活躍する高齢者の活動といった、ポジティブな面についても積極的に扱うことが重要であると考え。高齢者に対する正しい知識を身につけることで、高齢者への関わり方や高齢社会について考え、課題自体を認識し、対立に対処する力を育成するという、少子高齢化社会に対する心理的なハードルを下げるための足掛かりとなることを期待し、本授業の実践を試みた。

## 2. 単元計画

本単元は、全3時間で構成されている。本単元の計画を、表2-1に示す。

第1時では高齢者の心身の特徴について学び、その特徴から生活上の課題を推察する。特に、かかりやすい疾病の中で認知症について扱い、認知症の方が見ている視点から日常生活を考えることで、認知症の方との接し方について学習する。第2時では、介護をする側の心構え及び基本的な介護の技能習得を目指し、擬似高齢者体験及び車椅子体験を行う。心身の不自由な方の生活について体感し、要介護者、介護者の両面から身体の不自由について理解する。本授業である第3時では、高齢化の現状やそれに伴う社会問題として、介護の問題を主軸に授業を展開する。詳細は、次章にて扱う。

表2-1 単元指導計画

時間	○学習目標 ・具体的な学習活動
第1時	○高齢者の心身の変化や生活上の課題について理解する ・高齢期の心身の特徴や、かかりやすい疾病について学習する
第2時	○身体が不自由な人の視点・感覚を理解するとともに、安全に介助する技能を身に付ける ・高齢者体験を行い、身体の不自由な状況での生活を想像する ・車椅子乗車、介助を体験し、基本的な使用方法及び介助方法を理解する。
第3時 (本時)	○高齢化の現状やそれに伴う社会問題についての学習を踏まえ、高齢者を支える立場から高齢者との接し方について考える ・高齢化の現状及び日本の介護保険制度の概要を理解する ・介護の体験談から、介護の問題点を考える ・活躍する高齢者やアクティブシニアの割合を学ぶ

## 3. 公開授業の概要 ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

本単元では、以下の3つの観点から、生徒エージェンシーの育成を目指した授業を展開していく。

- ①課題自体を認識し、対立に対処する力：高齢者の実態を理解し、高齢化に伴う社会の変化について対応する力
- ②AARサイクルを回す力：高齢期の心身の特徴についての知識を踏まえ、自らの考えを持ち、高齢者に関わるることができる力
- ③責任ある行動を取る力：主体的に課題に取り組み、ノーマライゼーションを実現しようとする態度

本授業の概要を、表3-1に示す。老いるということに対して持つイメージについて、ポジティブ、どちらでもない、ネガティブ、のどれに当たるかを生徒に尋ねると、ほとんどの生徒が“ネガティブ”であると挙手をした。次に、展開で、高齢化の現状、介護制度について学んだ上で、介護の体験談を読み込む。今回の授業では、体験談を通して介護の問題点を考えることをねらいとし、在宅介護における介護と家庭の両立についての体験談(A)、老老介護の刑事事件の報道内容(B)を用いた。A、Bの資料の共有を経て介護者の負担感を減らすための方策について考えを深めたが、実際に介護に関わることも少ない生徒たちにとって、介護の問題は重大ではあるが身近ではなく、少々イメージしにくいことが考えられる。そこで、実際に体験談の介護者として介護を担う立場だったらどうして欲しいか、という視点で考えるよう指示を出した。さらに、Bの刑事事件では、被告人は母親が31歳の時に生まれた子どもであることについても言及したことで、生徒にとって現実味を帯びた話し合いに展開したように感じる。

このような展開で授業を進めたが、まとめでは、実際に介護を必要とする高齢者は全体の20%程度であるという統計に着目する。高齢者の高齢者に該当する年齢の芸能人や、地域で活躍する高齢者など、就労している“アクティブシニア”と呼ばれる高齢者や、就労はしていないが、就労意欲のある“ディフェンシブシニア”と呼ばれる高齢者は、高齢者人口の半数にのぼること、授業者自身の祖母の話題などを出し、高齢者が必ずしも介護が必要であり、支えなくてはならない存在ではないことを提示する。さらに、樋口了一氏の「手紙」という歌の歌詞を用い、生徒自身が、今高校生として、どのように高齢者と関わりたいか、関わるときかについて、自分の考えをまとめる。

本授業を通し、前述の①課題自体を認識し、対立に対処する力、②AARサイクルを回す力を身につけ、それらをもとに、③責任ある行動を取る力を育成することを目指した展開となっている。

#### 4. 公開授業を受けて～単元における生徒の変容と今後の課題～

本単元の1時間目から公開研で行った授業の序盤にかけては、授業の様子や生徒のワークシートへの記述からは高齢者に対して漠然としたイメージしか持たず、また、老いることに対してネガティブな感情や、差別的な感情を抱いている生徒が見られた。しかし、本授業を通し、「古い」を多面的に捉えることができるようになってきた生徒が増えたように感じる。授業の最後に記述したワークシートより、「古い」を多面的に捉えている生徒の記述(一部抜粋・要約)を、以下に示す。

- ・介護は子供をもう1人育てるような感じだと思った。でも相手は昔は自分を育ててくれた人で(中略)なんてこうなってしまったのと理解・受け入れることが難しいのではないかと考えた。
- ・老後や介護というと、ネガティブなイメージが多かったが、それをサポートするための支援制度が多くあることを知れて、もともと持っていた(マイナスの)イメージが少し減った。

これらの記述から、本授業を通し、生徒が高齢者、老いに対して持っていた漠然としたイメージが明瞭化され、高齢期について考える礎を築ききっかけとなったのではないかと考察する。今回の単元指導計画では、実際に高齢者と関わったり、自分自身の高齢期について考えたりすることができなかったため、これらの点については今後の課題としたい。

#### 5. 引用文献

- ・中央教育審議会, 2025, 家庭科、技術・家庭科(家庭分野)における目標・内容等のあり方について, [https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt\\_kyoiku01-000045505\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt_kyoiku01-000045505_03.pdf), 2025/12/21
- ・内閣府, 2025, 『高齢社会白書』
- ・文部科学省, 2019, 『高等学校学習指導要領解説家庭編』

表3-1 本時の展開(概要)

○学習の流れ・生徒の活動	
導入	○老いることのイメージを共有する
展開	○1. 高齢化の現状と、それに伴う社会問題について学習する ○2. 介護制度について理解する ○3. 介護の実態について考える ・ A,Bに分かれてグループワーク ・ A,Bの資料の内容を共有 ・ 介護者の負担感を減らすために必要なことについて考える ○4. 高齢者虐待の実態について理解する ・ 発生原因、背景等について学習する
まとめ	○5. 高齢者を支え、共に生きる立場として考える ・ 社会で活躍している高齢者の活動を知るとともに、「手紙」(樋口了一)の歌詞に触れながら、自分なりの高齢者との関わり方について考える

研究協議会

## 「生徒エージェンシーの育成を目指す高齢者分野学習の検討」

提案者 野澤 凧沙

助言講師 渡瀬 典子

### 1. 本校からの提案

生徒エージェンシーの育成を目指した高齢者分野学習のためには、まず、生徒が高齢者に関して興味関心を持つこと、また、学習内容を自分ごととして捉えられることが重要である。しかし、実際には、高齢者や老いることについてネガティブなイメージを持つ生徒が多く、一部の生徒の中には“エイジズム”のような意識が潜在しているように感じる場面もある。

一方で、生徒の自身の祖父や祖母、関わりのある高齢者についてのイメージを尋ねると、「優しい」「物知り」など、ポジティブな感情が強く、一般的な高齢者と、自分と関わりがある高齢者とでは、そのイメージに大きな乖離が見られた。

そこで、本授業では、高齢者や少子高齢化社会についての正しい知識を身につけた上で、高齢者、老いに対するネガティブな側面とポジティブな側面について考えていく。これらを通し、生徒が課題を認識し、自ら高齢者と関わり、責任のある行動を取るといった生徒エージェンシーの育成を目指した構成となっている。

### 2. 協議会における議論

#### 2.1. 高校生が高齢者について学ぶ意味

超高齢化社会を迎えた日本ではあるが、大人でも、実際に高齢化社会が到来していることや、それに対する恐怖心・危機感が欠如していると実感している。そのような状況において、高校生が高齢者・高齢期という、自分にとって関わりが薄い領域について意欲的に学ぶには、学習内容を自分ごととして捉える必要がある。そのためには、誰しもが必ず高齢者になるということ、また、平均寿命の延伸から人生の中で高齢期の占める割合が増加することを教員がしっかりと伝え、生徒自身に高齢者・高齢期を自分ごととして意識させることが重要なのではないだろうか。歳を重ねることで、今までできたことができなくなる、つまり、できていたことが“減って”しまう、ということが、高齢者に対するネガティブなイメージを起因させる大きな要因でもあったと考えられる。今後の社会を中心的に担う存在である高校生が、“できないこと”を受容することが成熟した社会につながる、という考え方を持つことを目的とし、高等学校家庭科での高齢者分野の授業展開が重要であると言える。

#### 2.2. 学習指導要領の改訂に伴う高齢者分野の学習内容の深化

次期学習指導要領改訂に向け、中央教育審議会では、少子高齢化やライフデザイン（生活設計）を扱うことが指針として挙げられている。すでに現行の学習指導要領では、高齢者の心身の特徴や、かかりやすい疾病、基本的な介助方法について扱うことが記載されている。これに加え、高齢者の分野において少子高齢化、ライフデザインについて扱うことは、生徒が高齢者理解を深めるために重要ではあるが、限られた授業時間でこれらの問題をどう扱っていくかは課題となるだろう。

#### 2.3. 生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか

高齢者・高齢期について学ぶことは、自分自身のこれからの生き方を考えることにつながる。今後、平均寿命はさらなる延伸が予想され、高齢化率も上昇することが示唆されている。そのような社会を生き抜く生徒が、身近な高齢者や活躍する高齢者に接することで、より良い人生＝ベターライフを送るための足掛かりとするきっかけを持つことができるのではないだろうか。このように、高齢者について学び、積極的に関わり、ベターライフの実現に向けて家庭・地域・社会問題について考えることが、生徒エージェンシーを育成することにつながると思う。

### 3. 課題

研究協議の内容から、家庭科の課題としては、“時間数”と“生徒の学習意欲”の2点が挙げられる。増加する学習内容に対応し、限られた時間数の中で生徒の興味関心を惹きつけられる授業を展開し、高等学校家庭科の授業で生徒が生活に関する課題を認識し、対応し、自らの知識をもとに責任ある行動を取る力を習得できるような授業実践に向け、尽力したい。

## 公開研 公開授業Ⅱ

## 外国語科（英語コミュニケーションⅡ）

## 「インタラクションを通じた内容理解—教科書本文の再利用—」

授業者 伊藤 賢佑

## 1. 研究主題との関わり ～生徒エージェンシーをどう育て、どう評価するか～

本授業は、教科書本文を「繰り返し」活用した言語活動 Q&A Interview を通して、より確実な内容理解や語彙・表現の定着を目的としたものである。この授業実践は、生徒エージェンシー、特に羅針盤モデルにおける「目的意識」や「希望」の領域に資すると考えられる。今回の授業で目指す英語が「使える」生徒の育成は、ひいては生徒が自らの考えや価値を力強く表現し、未知の世界や新しい可能性を自ら切り拓く力そのものとなるだろう。ただし、本授業は生徒エージェンシーの育成を直接の目標としたものではなく、英語の「使える」高校生を育成するための授業実践を通して、長期的に生徒エージェンシーを育む基盤を形成するための言語活動の一例であるということは強調しておきたい。

## 2. 単元計画

時間	学習内容
1 時間目	単元の導入, Warm-Up (p.100), Listening 1 (pp.100-101) 題材に関するスモールトーク, リスニング
2 時間目	Reading 1 ① (p.102): 内容理解, 音読 パラグラフ・チャートを使った聴解・読解, サマリーを使った音読活動, リテリング
3 時間目	Reading 1 ② (p.103): 内容理解, 音読 パラグラフ・チャートを使った聴解・読解, サマリーを使った音読活動, リテリング
4 時間目 (本時)	Reading 1 ③ (pp.102-103): Q&A Interview 概要の復習, 音読, Q&A Interview
5 時間目	プレゼンテーション “Who should we celebrate on our money?” (準備) Reading 1 (p.102) の復習テスト実施, 各グループでの準備
6 時間目	プレゼンテーション “Who should we celebrate on our money?” (発表) Reading 1 (p.103) の復習テスト実施, 各グループによる発表

## 3. 公開授業の概要 ～生徒エージェンシーの育成の観点から～

本授業で目指すのは英語が「使える」生徒の育成であり、それを通して長期的に生徒エージェンシーを育成する基盤を形成していくための言語活動の一例である。英語が「使える」生徒の育成のためには、十分な量のインプットに触れさせ、その後の繰り返しの練習によってインテイクを促すことが不可欠である。

英語コミュニケーションの授業では、多くの場合、教科書が主要なインプット源となる。しかし、授業内で教科書の英語に十分に触れ、かつそれを繰り返し使用する場面（定着に向けた十分な量のプラクティス）が確保できているのだろうか。一時間の授業で行う読解・聴解、音読などの活動だけで、十分なインプットや練習量が達成されているとは必ずしも言えないだろう。実際には、授業後に教科書を開く機会が少なく、定期考査直前まで復習されないままの生徒も多いため、語彙や表現の定着が不十分なまま終わってしまう可能性がある。

以上のような課題を背景に、本授業では Q&A Interview という活動を実施した。この活動では、生徒は Interviewer・Interviewee・Referee の3つの役割を与えられ、3人グループで教科書本文に関するインタビュー（インタラクション）活動を行う。Interviewer は、ハンドアウト（図1）に載っているキーワードを Interviewee から引き出すために教科書内容に関する質問を行い、Interviewee はその質問に答え、Referee は二人のやり取りを聞きながらキーワードが適切に引き出されたかを判断し、ハンドアウトに記録をする（図2）。

図1 Interviewer が使用するハンドアウト (例)

Part 1			
行	Key words	✓	配点
1	"Bryn Mawr"		3
			3
6	"a leading institute"		2
8	"two decades"		2
			3
15	"sent" & "government"		2
18	"elementary school"		3
			2

※ or: どちらかを引き出せればOK / and: すべて引き出さないと○にはならない

図2 Referee が使用するハンドアウト (例)

Part 1				
◆ Today's member: Interviewer ( ) · Interviewee ( ) · Referee ( )				
行	Key words	条件	配点	○×△
1	"Bryn Mawr"	アメリカの女子大学であり、1889年から1892年まで津田梅子が在籍していたことが分かる。	3	
5	★ "scholarship"	女性の高等教育における日米のつながりの強化に役立てられたことが分かる。	3	
6	"a leading institute"		2	
8	"two decades"		2	
13	★ "(almost) half"	津田梅子が生まれた1864年頃は今は全く異なっていたという事がわかる。	3	
15	"sent" & "government"		2	
18	"elementary school"	女性のための中等教育もほとんど存在していなかったことが分かる。	3	
21	★ "sister(s)" & "modernize"		2	

※ or: どちらかを引き出せればOK / &: すべて引き出さないと○にはならない / ★: Hidden Keyword

Score: \_\_\_\_\_ /20

Interviewer は内容を理解した上で効果的な質問の仕方を工夫する必要があり、Interviewee も質問に答えられるよう本文の理解を深めなければならない。また、Referee も正確な判断を行うために内容をしっかり把握しておくことが求められる。このように、役割ごとに求められる行動は異なるが、教科書本文の内容を隅々まで理解していることはすべての生徒に共通して必要である。インタビューを行う前には準備時間が与えられるが、教科書本文の深い理解が不可欠であることから、その時間を活用して集中して読み直すことが期待される。さらに、キーワードをうまく引き出せればポイントが与えられることや、グループ内で役割が割り当てられ、他者との協働が求められることから、一度授業で扱った文章であっても、楽しく読み直せる、エンゲージングな活動になっているとも言えるだろう。

本授業では、5分程度のウォーミングアップの活動を実施した後、本文の復習として音読を行い、Part 1・Part 2に分けてQ&A Interviewの活動を実施した。

#### 4. 公開授業を受けて ～ 単元における生徒の変容と今後の課題 ～

今回の授業では、Q&A Interviewの活動を通して、特にインタビュー実施前の準備時間において、生徒が教科書本文を丁寧に読み直す機会を確保することができた。Q&A Interviewでは本文の細部まで把握しておくことが求められるため、その前段階として行った音読活動においても、生徒が漫然と読むのではなく、内容や語彙・表現を意識しながら取り組む姿が多く見られた点は大きな成果である。また、この活動を授業に組み込んだことで、生徒が飽きることなく教科書本文に「繰り返し」触れ、練習を重ねる時間を授業の流れの中に自然に位置付けることができたと思われる。

ただし、こうした学習姿勢は活動導入の初期段階から一貫して見られたわけではない。むしろ、活動を複数回行う過程で、生徒の取り組み方に徐々に変化が生じ、「生き生き」と積極的に関わる生徒が増えていった印象が強い。この変容には、前述のように「本文の隅々に至るまで理解していることが求められる」というQ&A Interviewの活動特性が大きな影響を与えていたと考えられる。こうした要件が、生徒にとって教科書本文を深く読み直す動機づけとなり、学習意欲や取り組みの質の向上につながったと推察される。

最後に、今後の課題として挙げるべき点は、英語が「使える」高校生の育成に向けた言語活動のいっそうの充実である。Q&A Interviewは、言語使用を促す有効な活動の一つではあるものの、それ自体が最終的な到達点ではなく、英語が「使える」生徒の育成に資する言語活動の一例、つまり目標を達成するための一手段に過ぎない。したがって、本活動を継続的に実施する中で、生徒の実態やその変容に応じて、本活動がより効果的な練習の場となるよう、継続的な改善が求められる。

さらに、Q&A Interviewのみに依存するのではなく、他の言語活動についても質と量の両面から充実を図ることが求められる。十分なインプットとプラクティスの機会を授業内で確保し、円滑なアウトプットへと結びつけていくことができるような授業デザインの研究・開発に継続的に取り組んで行くことで、英語が「使える」高校生の育成につながる授業実践の深化に寄与すると考えられる。

研究協議会

## 「インタラクションを通じた内容理解 – 教科書本文の再利用 –」

提案者 伊藤 賢佑

助言講師 金谷 憲

### 1. 本校からの提案

本授業は、Q&A Interview の活動を通して教科書の英語に繰り返し触れる機会を設け、十分なインプットと、それに基づくアウトプットの練習を確保することで、英語が「使える」高校生の育成を目指すものである。また、こうした言語活動の充実を継続的に図ることで、生徒エージェンシーを長期的に育むための基盤を形成することもねらいとしている。英語運用能力の育成に資する言語活動を充実させるためには、授業における主要なインプット源である教科書に改めて着目し、その活用方法について理解を深めつつ、活動の開発・改善を進めていく必要があるだろう。

### 2. 協議会における議論

#### ・公開授業の内容について

本時は Unit 7 Reading 1 の本文を扱い、Q&A Interview を中心として内容理解を深める授業が行われた。授業冒頭ではウォームアップで既有語彙を活性化し、ペア音読や内容確認を通して本文への理解を促した。中心活動である Q&A Interview では、生徒が質問し答える相互作用を通じて、本文を複数回読み返ししながら意味を構築する姿が見られた。

#### ・より良い授業に必要なこと

より良い授業の実現には、まず「生徒が主体的に意味をつくる場面を増やすこと」が重要である。Q&A Interview のように、生徒が自ら問いを立て、相手と対話しながら理解を再構成する活動は、エージェンシー（主体性）を育てる有効な手立てとなる。また、本文を一度読んで終わらせず、音読・要約・再話など、形式を変えて繰り返し扱うことで、処理速度や理解の深まりが促される。

さらに今回、参観者から特に高く評価いただいたのが、生徒のメモ取りの質である。特別な指導を施さなくても、生徒自身が「メモがないと太刀打ちできない」と理解し、必要な情報を取捨選択して書き留める習慣を形成している点は、本校の強みとして共有された。こうした“必要に迫られて自ら書く”メモ文化が学習の深まりに大きく寄与していることが確認された。加えて、ウォームアップやスモールタスクによって既有知識を活性化し、英語を使う必然性を感じさせることも、生徒の発話量と習熟度の向上に欠かせない。評価においては、結果のみならず、学習への関わり方・問いの質・協働の姿勢といった「プロセスを丁寧に見取る視点」が求められる。

#### ・ICT の利用について

ICT は「使うこと」自体が目的ではなく、学びを補助し、生徒の理解を助けるための手段として位置づけることが必要である。紙のほうが集中しやすい場面や、アナログで十分機能する活動も多く、無理に端末を使用する必要はない。一方で、ICT や AI（ChatGPT など）は、教材作成の効率化や本文の易しい版の生成、問いの例示など、教師の負担軽減と学習の多様化に寄与する可能性がある。生徒にとっても、適切な使い方を学ぶことで学びを広げるツールとなり得る。したがって、ICT は「便利なときに使う」「使ったほうが学びが深まる場面で使う」という柔軟な運用が望ましい。

### 3. 課題

生徒とのやり取りの機会をさらに充実させ、発話量を自然に増やせる仕掛けを継続して工夫していくことが求められる。また、教員が生徒との対話的な関わりを意識的に広げることで、生徒 Agency（生徒の主体性）の育成に一層寄与できると考えられる。協議会で共有された視点を日々の授業に落とし込みながら、学校全体で共有可能な実践アイデアを模索していくことが今後の課題となる。

## 5. 公開研での議論から

本章では、本公開研での様々な議論を踏まえ、今年度の課題について、“生徒エージェンシーを育み、評価すること”という視点と、“教科・科目を融合・連携すること”という視点の2点から整理し、次年度の取り組みに活かしていきたい。

### (1) 生徒エージェンシーを育み、評価すること

今年度（令和7年度）は、昨年度の反省を踏まえて、教員研修にて研究部（研究推進）から、生徒エージェンシーの羅針盤モデルやエージェンシー尺度の調査について具体的な提案を行なった。このことにより、AARサイクルを意識するなど、多くの教科・科目の実践の中で、生徒エージェンシーを育む切り口を具体的に示していた。

- ・本授業は、羅針盤モデルの「新たな価値を創造する力」とエージェンシー尺度の「成長マインドセット」への繋がりを意識した。生徒が新たな価値を創造するために学校教育に求められていることは、現状に疑問をもち、他者と協働しながら既存の枠組みにとらわれずに考える機会を与えることである。…（中略）…日常生活における物理現象の概念理解や生成AI・級友との対話で生じる批判的思考の促進を目指した（理科、公開授業）。
- ・家庭科の授業では、「答えのない問い」について考えることが多い。その中でも、特に家族や保育、高齢者などの分野は、明確な答えを持たず、自分がその課題に対し何を考え、どう感じるか、そしてどう行動していくか、という思考のプロセスを重視する。この思考のプロセスを育むことは、本研究会の主題である生徒エージェンシーを育成するために求められる要素のひとつである（AARサイクルを回す力）と考えられ、自分の価値観や他人の価値観を受け入れ、お互いを認め合うこと（責任ある行動をとる力）にもつながると言える（家庭、公開授業）。
- ・本実践においては仮名の書の創作を通じて、特に羅針盤モデルにおける「新たな価値を創造する力」や「AARサイクル」との関連性を意識しながら実践した。…（中略）…創作の一連の学習過程を通じて、観点を確認することや他者との相互鑑賞・意見交換等の学習活動で得た視点を活用し試行錯誤しながら取り組む中で、生徒はAARサイクルを実践していくこととなる（書道、公開授業）。

一方で、生徒エージェンシーを評価することについては多くの教科・科目で課題であることが言及された。生徒エージェンシーは、各教科・科目の一授業で育むことができるような類のものではないので、カリキュラム・マネジメントを継続し、その質を向上させていくことが重要であると言えよう。

- ・生徒がエージェンシーを獲得する過程では、自己の（あるいは自己が所属する集団の）変容に気づくことが必要である。題材設定はもちろんだが、それを生徒がどう日常化していくのかを見越した活動の設定、すなわちカリキュラムマネジメントが重要であろう（音楽、研究協議）。
- ・自立支援も行い、管理も行い、双方がバランスを考えながら行わなければならない。改めて単元計画を常に試行錯誤していく必要があり、それは教員のエージェンシーを高めることにもなるのではないか（保健体育、研究協議）。

### (2) 教科・科目を融合・連携すること

昨年度（令和6年度）に注力した「教科・科目の融合・連携」についての取り組みであるが、今年度も学校設定教科として設置した「SSH 地球科学」をはじめ、国語・数学、数学・生物、古典・近代以降の文章、など意欲的な提案がなされた。こちらでも、教科・科目の融合・連携を、生徒エージェンシーを育むための切り口にしていった実践が増えた。“既存の枠組みとしての教科・科目”を飛び越える体験を通して、深い学びの実現や新たな自分探しに繋げようという取り組みが多かった。

- ・不確定性の高いこれからの時代で要求されるのは、専門的な知識だけではなく、幅広い経験を統合した分野や枠にとらわれない知恵である。しかし、学校の授業が科目ごとに構成され、そこで評価もされる以上「枠」が自然に形成されてしまい、その中で考えることが増えてしまう。今回の授業では、その枠組みを壊したり、新たに自分で作ったり、枠を越えることの1つの機会を作り、枠組みが絶対的なものではなく、自らが枠について扱うことへの気づき（成長マインド、変革をもたらすコンピテンシー）に繋がることを大きな目的としている（国語・数学、公開授業）。
- ・本校の「羅針盤モデル」が重視する「目的意識」および「自己効力感」に着目し、学習内容を自分や家族の未来と結びつけて考えられるように設計した。…（中略）…生徒が主観的な印象ではなく、科学的データとその背景を理解した上で意思決定する姿を目指した取

り組みであり、正解のないテーマに向き合う際の「学び続ける態度」を育むことも意識した（数学・生物、公開授業）。

- ・本校生徒は、エージェンシー尺度の「アイデンティティ」項目のうち「自分なりの価値観を持っている」「自分の個性を大切にしている」という項目には「自分は該当する」と肯定的な回答を寄せたが、一方で「自分の中にほんやりとした不安がある」と答えた生徒も多かった。…（中略）…今回の単元が、これらの科目に自分なりの意味づけをして向き合う端緒となり、生徒たちが自覚的なことばの使い手となる素地を育成することを期待した（言語文化、公開授業）。

それに対して、教科・科目の融合・連携の取り組みにおいても課題は同様で、評価の方法に関して検討する必要がある。また、融合・連携の取り組みをカリキュラムの中にどのように位置付けていくのか、一過性の取り組みではない、質の高いものにするにはどうすればよいのかについても議論が及んだ。

- ・生徒の自己効力感が高くなかったということであるが、日本全体で低く、それを育むためには「社会の中で自分がこういう活躍ができるんだ」というところがないといけな。教科連携や総合的な探究の時間で社会との関わりを増やしていく必要がある。さらに教科連携や総合的な探究の時間を生かすためには、普段の教科の授業も変えていかないといけない。公開授業は1時間であるが、年間を通じて、テーマを決めて、複数の教科で連携を行なっていくことが必要なのではないか。指導案も全体計画の中の位置付けで書くべきである。本時の目標もエージェンシーに関したことで掲げ、それに対して表裏一体となるような評価規準を設けるべきである（数学・生物、研究協議）。
- ・今後の課題として6つの点が挙げられた。…（中略）…2つ目に「地学融合授業の評価基準策定」で、SSH地球科学における融合授業の成果を測るための評価基準を策定する必要がある。…（中略）…6つ目に「生徒へのフィードバック」で、生徒の主体性（エージェンシー）を評価し、その結果を具体的にフィードバックする手法を確立、共有することである（SSH地球科学・防災、研究協議）。

### (3) 次年度の取り組みに活かすために

上記(1)および(2)のように、各教科・科目の実践でも、融合・連携した実践でも現状と課題はほぼ類似していた。

そこで、今後、生徒エージェンシーを育むためのカリキュラムを構築していくために、次の2つの点を改善点として提案したい。

#### ①「指導と評価の一体化」の徹底

上記のように、生徒エージェンシーは一つの授業で育むことができるようなものではない。単元、科目、教科、学校全体…と大きな視点で取り組むべき課題である。授業づくりにおいては、他の資質・能力と同様に、その育成を目標として定め、目標が達成できるように逆算的に授業を構築していく。そして時々生徒が資質・能力を表出するようなパフォーマンス課題を設定し、その成果を評価する。「指導と評価の一体化」の考え方に沿って、このようなサイクルを繰り返すようにカリキュラムを作成することが重要である。このような考え方を教員に徹底すると共に、生徒にも意識させるような指導が求められる。

#### ②授業内容および授業スタイルの検討

秋田・松田（2025）の中で、教科教育（特に理科）と生徒エージェンシーの育成を両立させていく接点として、次の5つを例示している。

1. 教科内容の学習の過程に生徒エージェンシーの育成を盛り込み、相互に働かせる
2. 教科内容の学習に対して、目的意識を強く持つ
3. 教科内容の学習において、社会や現実世界とのつながりを意識する
4. 教科内容の学習において、生徒は教師および他の生徒と共同で概念構築を行う
5. 教科内容の学習において、対立やジレンマに対処する力を育む

例えば、上記5つのポイントを踏まえ、改めて授業内容を検討すれば、これまで学習してきた知識が如何に社会とつながるのか、如何に学ぶ意義があるものなのか、同じ知識を学ぶにしても、別のアプローチが必要であると気づくだろう。また、授業スタイルについても同様で、今まで以上に、教師と生徒、生徒同士が議論し、時に生徒が価値判断をする場面を設定しなければならないだろう。そして、教科の学びがこれまで以上に“自分ごと”になるよう指導の工夫が求められる。上記のポイントなどを一つの目安としながら、継続的に授業内容や授業スタイルを検討していくことが必要である。

### 6. おわりに

最後に、次年度に向けて、ここまでの議論をまとめた。今年度までの3年間、「生徒エージェンシーを育む

カリキュラム・マネジメント」というテーマで，“探究活動”，“教科融合・連携”，“学習評価”の3つの観点から生徒エージェンシーの育成について考えてきた。これまでの積み重ねの中で徐々に生徒エージェンシーの育成について理解を深め，3年間を経た現在，やっとスタート地点に立ったような実感もある。また，最低限の認識として，“継続的に多くの教員が協力して，カリキュラムをデザインすること”の重要性は共有することはできた。生徒エージェンシーを育むためには，ある個人やある教科だけが努力するのでは，カリキュラムの中に根付かせることができない。学校単位でカリキュラムを構築していくことが大切なのである。今後，次なるテーマを検討する段階ではあるものの，これまでの積み重ねが活かされるものを提案したい。

## 謝辞

福井大学大学院連合教職開発研究科 木村 優 教授には，本校8月研修の講師，そして第24回公開研でのご講演者を引き受けて頂きました。ご講演「エージェンシーを切り口にした授業の実践と評価」では多大なるご教示と有益な示唆を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

## 引用文献

- OECD (2020) 「Student Agency for 2030 仮訳」.  
[https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD\\_STUDENT\\_AGENCY\\_FOR\\_2030\\_Concept\\_note\\_Japanese.pdf](https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf) (2025年7月29日)
- 秋田喜代美・松田恵示 (2025) 教育におけるエージェンシーの概念と実践, pp.74-89, 長肆クラルテ
- 木村優, 一柳智紀 (2022) 「解放と変革の力としてのエージェンシーを再考する」, 教師教育研究, 15, pp.411-418
- 研究部 (研究推進) (2023) 「生徒 Agency を育むカリキュラム・マネジメント(1): 探究活動を軸としたカリキュラムづくり 第22回公開教育研究大会を受けて」, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 61, pp.117-158
- 研究部 (研究推進) (2024) 「生徒エージェンシーを育むカリキュラム・マネジメント(2): カリキュラムづくりを見据えた教科融合・連携の試み 第23回公開教育研究大会を受けて」, 東京学芸大学附属高等学校研究紀要, 62, pp.65-102
- 東京学芸大学附属高等学校 (2023) 「令和6年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書(第1年次)」 pp.43-46

